

柿ノ木平遺跡 堰根遺跡

—浅岸地区区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ—

第4分冊 堰根遺跡 本文編

2008.3

盛岡市・盛岡市教育委員会

柿ノ木平遺跡 堰根遺跡

—浅岸地区区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ—

第4分冊 堰根遺跡 本文編

2008.3

盛岡市・盛岡市教育委員会

例 言

1. 本書は、盛岡市浅岸字柿木平、上村・堰根地内に所在する柿ノ木平・堰根遺跡発掘調査報告書第4分冊「堰根遺跡本文編」である。
2. 本書は、浅岸地区区画整理事業に伴い実施した平成8～16年度の調査成果の報告書であるが、平成12年12月24日に発生した盛岡市教育委員会文化財収蔵施設火災による記録図面及び写真等の資料焼失のため、12年度以前の調査成果については、可能な限りの資料呈示に止まっている。

目 次

目 次
表 目 次

I. 調査内容

1. 検出された遺構と遺物	1
(1) 縄文時代の竪穴住居跡	2
(2) 縄文時代の土坑	7
(3) 縄文時代の遺物包含層	13
(4) 平安時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡	16
(5) 中世以降の竪穴建物跡・掘立柱建物跡	45
(6) 平安時代以降の土坑	52
(7) 平安時代以降の焼土遺構・溝跡・ピット	56
(8) 平安時代以降の遺構外出土遺物	56
II. まとめ	57

表 目 次

第1～5表 縄文時代土坑計測表1～5	8～12
第6・7表 平安時代以降の土坑計測表1・2	53・54

I. 調査内容

1. 検出された遺構と遺物

調査経過 堰根遺跡は、柿ノ木平・上村屋敷遺跡の東に接する縄文時代早期から中世にかけての遺跡である。過去の記録では、大正～昭和初期の頃に堰根地内の通称「かぶと畑」より内耳鉄鍋が人骨に伴い出土したことが紹介され（1972 草間俊一「内耳鉄鍋と人骨」岩手県九戸村教育委員会）、昭和20年代には開田中に多量の土師器が出土したことが記録されている（1958 草間俊一「盛岡市史－先史期－」盛岡市）。昭和50年代には柿ノ木平遺跡と同一遺跡として扱われていたが、平成8年度以降の調査により、遺跡が立地する段丘面が柿ノ木平遺跡の立地する段丘面より高位であること、遺跡の主体となる時代が異なることから「堰根」遺跡に名称を戻した経緯がある。

浅岸地区区画整理事業

平成8年度より、浅岸地区区画整理事業に伴う堰根遺跡の発掘調査が開始された。調査総面積は28,312㎡に及び、調査の結果、縄文時代早期から中世にかけての遺跡であることが明らかとなった。調査は区画整理の工程に合わせたため、工事の進捗により同一調査区を複数年かけたものが多い。そのため、本報告においては次数を区切らず一括して報告することとした。

次数	旧次数	調査年月日	面積 (㎡)	備考
1	NKD010	平成8年10月3日～（第2次に継続）	4,205	
2	NKD011	平成9年4月7日～6月29日	(4,205)	
3～6	—	平成12年4月5日～12月5日	4,600	
7	試掘	平成12年10月16日～10月19日	62	
8	試掘	平成12年9月25日～10月3日	1,200	
9	試掘	平成12年10月23日～10月26日	30	
10	試掘	平成12年6月5日～10月26日	5,348	
11	—	平成13年5月28日～7月18日	1,719	
12	—	平成14年9月9日～12月4日 平成15年4月14日～12月12日	7,750	
13	—	平成16年4月12日～12月21日 平成17年4月4日～6月10日	9,750	
14	—	平成16年6月28日～7月21日	288	

検出状況 堰根遺跡が立地する沖積段丘は、東から流れる中津川が北から流れる米内川と合流し、水量を増した中津川の氾濫・侵食により形成された段丘である。基盤となるのは蛇紋岩を主体とした変成岩で、上位には砂礫層が厚く堆積する。砂礫層上部には薄く八戸火山灰が堆積し、小岩井軽石層、暗褐色土層（Ⅲ層）、黒褐色土層（Ⅱ層）、表土（Ⅰ層）の順で地表面に至り、遺構検出はⅡ層上面で行われた。

検出遺構 検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡19棟（R A 001～019）、土坑254基（R D 001～254）、平安時代の竪穴住居跡82棟（R A 501～582）、掘立柱建物跡1棟（R B 501）、土坑88基（R D 501～588）、溝跡12条（R G 501-1～511）、中世の掘立柱建物跡25棟（R B 1001～1025）、竪穴建物跡10棟（R E 1001～1010）、土坑42基（R D 1001～1042）、溝跡17条（R G 1001～1017）、柱穴2,239口である。

（1）縄文時代の竪穴住居跡（第1図～第7図）

R A 0 0 1 竪穴住居跡（第1図）

時 期 大木8b式 **位 置** Q2区 **平面形** 不整円形
規 模 長軸4.34m・短軸3.76m以上、深さ0.07m **重複関係** なし **掘込面** 削平
埋 土 A・B層に大別され、ともに竪穴埋土である。 **床面の状態** ほぼ平坦
石 囲 炉 中央部付近より東寄りに構築され、石組部は楕円形を呈する。
埋設土器 中心部付近より北寄りに埋設される（正位）。
出土遺物（第77図1） 1は埋設土器で、口縁部～体部上半は人為的に壊される。上部文様帯より隆沈線による懸垂文が垂下し、地文には複節縄文が縦位に施される。

R A 0 0 2 竪穴住居跡（第1図）

時 期 弥生後期（赤穴式） **位 置** Q2区 **平面形** 方形 **重複関係** なし
規 模 長軸3.60m・短軸3.17m、深さ0.19m **掘込面** 削平 **床面の状態** ほぼ平坦
埋 土 A～E層に大別される。A～C層は竪穴埋土、D・E層は周溝・ピット埋土である。
出土遺物（第78図1～24） 1は楕円状を呈した蓋形土器である。つまみ部の発達はいさいが、台部つまみ部の四隅に斜め方向の貫通孔をもつ。器面には数条の平行沈線による弧状文が描かれ、裾部には崩れた交互刺突が施される。2は頂部の縁が突出する小形の蓋形土器で器面には細沈線による弧状文が施される。13・14には沈線間に上下から刺突を加える交互刺突文が施される。3・17は口縁部にかけて直線的に開く鉢形土器の口縁部片で、口縁部下には交互刺突文が2段施される。4～7・18は弧状沈線文が施される甕形土器片である。8～12・20～24は甕形土器の小片で、地文には縦走または斜行する附加条縄文が施される。

R A 0 0 3 竪穴住居跡（第2図）

時 期 大木9式 **位 置** P3区 **平面形** 楕円形
規 模 長軸3.40m・短軸2.96m以上、深さ0.13m **重複関係** なし **掘込面** 削平
埋 土 A～C層に大別され、ともに竪穴埋土である。 **床面の状態** ほぼ平坦
複 式 炉 中央部付近より東寄りに構築される。石囲部は方形を呈し、東壁に接して浅い掘り込みがある。
出土遺物（第77図1～6） 1～6は沈線による楕円文・逆U字状文が施される小形深鉢である。2・3は波状口縁を呈し、地文には単節縄文が施される。

RA004 竪穴住居跡 (第2図)

時期 後期初頭 位置 R3区 平面形 不明 規模 不明
重複関係 なし 掘込面 削平 埋土 不明 床面の状態 不明

土器埋設炉 地床炉北西縁に接して深鉢 (第77図7) が埋設される (斜位)。

出土遺物 (第77図7・8) 7は土器埋設炉に斜位埋設された深鉢である。複合口縁を呈し、器面には網目状撚糸文が施される。8は7の深鉢内部より出土した深鉢で、波状口縁を呈し口縁部の無文帯は沈線により区画され、体部には単節縄文が施される。

RA005 竪穴住居跡 (第2図)

時期 大木8b～9式 位置 R4区 平面形 不整楕円形
規模 長軸3.66m・短軸2.38m以上、深さ0.12m 重複関係 RA006に切られる
掘込面 削平 埋土 A～C層に大別される。A層は竪穴埋土、B・C層はピット埋土である。

床面の状態 ほぼ平坦 複式炉 中央部付近より南西寄りに構築される。石囲部は長楕円形を呈し、北東端に深鉢 (第79図3) が埋設される (斜位)。

遺物の出土状況 前庭部底面に第79図2・4の土器が敷き詰められたかのように出土している。

出土遺物 (第79図1～5) 1～5は隆沈線による渦巻文と懸垂文が連結して施される土器である。
1・5は口縁部がラッパ状に開く小形深鉢で、波状口縁を呈する。2は口縁部が内湾する浅鉢で、口縁部文様帯には渦巻文と楕円文が連結して横位に展開する。体部には複節縄文が縦位に施される。3は複式炉に斜位に据えられた小形深鉢で、口縁部～体部上半は人為的に壊される。地文には単節縄文が縦位に施される。

RA006 竪穴住居跡 (第3図)

時期 大木8b式 位置 R4区 平面形 楕円形
規模 長軸5.57m・短軸4.53m、深さ0.46m
重複関係 RD024・028・029に切られ、RA005を切る 掘込面 削平
埋土 A～D層に大別される。A層は竪穴埋土、B層は周溝埋土、C・D層はピット埋土である。
床面の状態 ほぼ平坦。中央部付近に床構築土 (貼床) が認められる。
石囲炉 中央部付近より西寄りに構築され、石組部は方形を呈する。

出土遺物 (第80図1～9・第81図12) 1は口縁部が内湾し、器面に縄文が縦位に施される深鉢である。
2は地文に櫛目文が密に施される深鉢口縁部片である。3～5・7は隆沈線による渦巻文・楕円文・懸垂文が連結して施される深鉢体部片である。6は隆沈線が横位に展開する深鉢口縁部片である。8は削器で、背面両側縁に調整剥離が施される。9は石篋で、背面右側縁および下端、腹面右側縁に調整剥離が施される。12は表面に縁をもつ脚付石皿である。部分的に敲打痕が認められ、裏面には溝状の条痕を有する。

RA007 竪穴住居跡 (第2図)

時期 大木8b-1式 位置 R5区 平面形 楕円形
規模 長軸3.58m以上・短軸3.25m以上、深さ0.04m 重複関係 なし 掘込面 削平

埋 土 A・B層に大別される。A層は竪穴埋土、B層は周溝・ピット埋土である。

床面の状態 ほぼ平坦 石 囲 炉 中央部付近より北西寄りに構築され、石組部は方形を呈する。

出土遺物（第80図10・11） 10は体部下半～底部欠損のキャリパー形深鉢である。口縁部文様帯には沈線による区画文が描かれ、地文には単節縄文が施される。11は板状の石錐で、錐部にかけて入念な押圧剥離が施される。

R A 0 0 8 竪穴住居跡（第3図）

時 期 大木9式 位 置 S4・5区 平 面 形 不整楕円形

規 模 長軸3.47m・短軸2.57m、深さ0.43m 重複関係 R A 528に切られる

埋 土 A～D層に大別される。A・B層は竪穴埋土、C・D層はピット埋土である。

掘 込 面 削平 床面の状態 ほぼ平坦。中央部付近に床構築土（貼床）が認められる。

複 式 炉 石囲部は楕円形を呈し、南壁に接して2段の浅い掘り込みがある。

出土遺物（第82図1～6） 1は波状口縁を呈する深鉢で、波頂下には小渦巻文が施され、小渦巻文を連結点とする弧状文が施される。体部から底部にかけては渦巻文と懸垂文が連結して描かれ、地文に単節縄文が施される。2・3は口縁部が内湾する深鉢で、器面には沈線による渦巻文・逆U字状文が施される。3の地文には単節縄文が施される。4は隆沈線による渦巻文と懸垂文が連結して施される深鉢口縁部片である。5は肩部に吊手状把手をもつ小形の壺形土器である。器面には楕円文・U字状文が施され、文様区画内には複節縄文が充填施文される。6は全周縁に調整剥離が施される平基の石鏃である。

R A 0 0 9 竪穴住居跡（第4図）

時 期 前期 位 置 S4区 平 面 形 長方形

規 模 長軸5.37m・短軸3.34m、深さ0.08m 重複関係 なし 掘 込 面 削平

埋 土 A～E層に大別される。A・B層は竪穴埋土、C層は周溝埋土、D・E層はピット埋土である。

床面の状態 ほぼ平坦 地 床 炉 中央部付近より北西寄りに認められる。

出土遺物（第82図7） 7は結束をもつ斜縄文が縦位に施される深鉢体部片である。

R A 0 1 0 竪穴住居跡（第5図）

時 期 大木8b式 位 置 S4区 平 面 形 不明

規 模 不明 重複関係 不明 掘 込 面 削平

埋 土 不明 床面の状態 不明石組部は方形を呈する。

伏 甕 石囲炉の延長上に1個体の伏甕が検出された。本来の埋設面は後世の削平によって破壊される。

出土遺物（第82図8） 8は伏甕に転用された深鉢で、底部が部分的に破壊される。口縁部はラッパ状に開き、波状口縁を呈する。口縁部下には無文帯を持ち、体部には隆沈線による大渦巻文を中心に小渦巻文・円文が連結して展開する。地文には複節縄文が縦位に施される。

RA011 竪穴住居跡 (第4図)

時期 不明 位置 S4区 平面形 不整楕円形
規模 長軸5.33m・短軸4.19m、深さ0.23m 重複関係 なし 掘込面 削平
埋土 A～D層に大別される。A・B層は竪穴埋土、C・D層はピット埋土である。
床面の状態 ほぼ平坦 地床炉 中央部付近より南東寄りに認められる。
出土遺物 (第82図9～12) 9は地文のみが施される深鉢口縁部片である。10・11は全周縁に調整剥離が施される平基の石鏃である。12は削器で、背面下端に調整剥離が施される。

RA012 竪穴住居跡 (第5図)

時期 大木9式 位置 S4区 平面形 楕円形
規模 長軸3.36m・短軸2.76m、深さ0.32m 重複関係 RB1019に切られる
掘込面 削平 埋土 A・B層に大別され、ともに竪穴・ピット埋土である。
床面の状態 ほぼ平坦 複式炉 中央部付近より南東寄りに地床炉が認められる。燃烧部に接して浅い掘り込みがあり、南東壁に接してピットが掘り込まれる。
出土遺物 (第83図1～3) 1は体部下半～底部が欠損する深鉢で、器面には沈線による楕円文・逆U字状文が施される。地文には複節縄文が施文される。2は波状口縁を呈する深鉢で、波頂部下からは隆沈線による渦巻文と懸垂文が連結して垂下する。地文には単節縄文が縦位に施される。3は口縁部に吊手状把手をもつ深鉢口縁部片で、体部には櫛目文が施される。

RE013 竪穴跡 (第5図)

時期 早期中葉 位置 S4区 平面形 不整形
規模 長軸6.87m・短軸5.38m、深さ0.35m 重複関係 RB501・RA551に切られる
掘込面 削平 埋土 A～C層に大別され、ともに竪穴埋土である。
床面の状態 ほぼ平坦 炉 なし
出土遺物 (第83図4～8) 4は凸基の石鏃である。5は削器で、背面両側縁に調整剥離が施される。6は搔器で、背面右側縁および下端に刃部調整剥離が施される。7・8は両面調整石器である。

RA014 竪穴住居跡 (第6図)

時期 不明 位置 S4区 平面形 不明 規模 不明
重複関係 不明 掘込面 削平 埋土 A層は炉埋土である。
床面の状態 不明 石囲炉 石組部は不整楕円形を呈する。 出土遺物 なし

RA015 竪穴住居跡 (第6図)

時期 不明 位置 T4区 平面形 不明 規模 不明
重複関係 不明 掘込面 削平 埋土 A層は炉埋土である。
床面の状態 不明 複式炉 石組部は方形を呈し、石囲部に接して浅い掘り込みがある。
出土遺物 なし

RA016 竪穴住居跡 (第6図)

時期 不明 位置 T3区 平面形 不明 規模 不明
重複関係 不明 掘込面 削平 床面の状態 不明
埋土 A～D層に大別される。A・B層は炉埋土、C・D層はピット埋土である。
複式炉 石組部は方形を呈し、石囲部に接して浅い掘り込みがある。 出土遺物 なし

RA017 竪穴住居跡 (第6図)

時期 大木9式 位置 U3区 平面形 不明 規模 不明
重複関係 不明 掘込面 削平 床面の状態 不明 埋土 不明 炉 形状不明

出土遺物 (第84図1) 1は口縁部が内湾する鉢形土器で、底部を欠く。器面には隆沈線による渦巻文と懸垂文が連結して施され、地文には複節縄文が縦位に施される。

RA018 竪穴住居跡 (第6図)

時期 不明 位置 U3区 平面形 不明 規模 不明
重複関係 RD218に切られる 掘込面 削平 床面の状態 ほぼ平坦
埋土 A・B層は竪穴埋土である。 石囲炉 石組部は楕円形を呈する。
出土遺物 なし

RA019 竪穴住居跡 (第7図)

時期 大木8b式 位置 U3区 平面形 不整楕円形
規模 長軸6.05m以上・短軸6.10m以上、深さ0.62m
重複関係 208～210・212・213・248・584に切られる
埋土 A～F層に大別される。A～C層は竪穴埋土、D～F層は周溝・ピット埋土である。
掘込面 削平 床面の状態 ほぼ平坦。部分的に床構築土(貼床)が認められる。
複式炉 中央部付近より北西寄りに構築され、石囲部に接して浅い掘り込みがある。

出土遺物 (第84図2～7) 2は口縁部～体部上半欠損の深鉢で、器面には隆沈線による渦巻文と懸垂文が連結して施される。地文には単節縄文が縦位に施される。3・5は沈線による円文・逆U字状文が施される深鉢片で、5は波状口縁を呈する。4は上部文様帯より垂下する懸垂文が施される深鉢体部片である。6は削器で、背面の打面以外に刃部調整剥離が施される。7は磨製石斧である。基部に敲打痕、刃部に整形段階の剥離痕が残される。

(2) 縄文時代の土坑 (付図2、第85・86図、第1～5表)

縄文時代の土坑は、段丘Ⅰ北縁を中心に調査区全域で検出されている。土坑は平面の形状から大きく2形状(円形・溝状)に分類される。本報告書では概要を記し、規模等については表(第1表～第5表)にまとめた。

円形土坑 平面形が円形を呈する土坑は、調査区北辺の段丘Ⅰ縁に沿いに構築された傾向があり、特に第13次調査区(S3区)に集中する。

検出された円形土坑は、断面形状がフラスコ形を呈するもの(RD052・066・074・087・101・104・108・110・113・121・123・124・129～131・133・136・138・139・144・146・150～158・160・163・166・170・175・181・205・206・209～215・217・220・222・223・239・240・243・248・253など)と、壁が外傾するもの(RD001～007・012～024・063・076・109・112・114・118・120・135・137・140・142・145・147～149・161・162・167～169・177・182・208・216・218・219・225・228・241・244・249～252など)に分けられる。

構築時期 主な円形土坑群の構築時期は、土坑内からの出土遺物より縄文時代中期中葉～末葉と考えられる。ただし、第13次調査区で検出された数多くのフラスコ形土坑は出土遺物(第85図3・第86図1・2)より縄文時代後期初頭の土坑が多数であると思われる。

出土遺物(第85図1～3) 1は口縁部がラッパ状に開く小形深鉢で、屈曲部には3条の平行沈線が施される。体部には上部文様帯より懸垂文が垂下し、地文に単節縄文が縦位に施される。2は体部下半欠損の深鉢で、器面には沈線による横S字状文が描かれる。文様区画内には単節縄文が充填施文される。3は波頂部に刻みをもつ深鉢で、縄文に加飾された複合口縁を呈する。体部上半には、沈線による幾何学的モチーフが描かれ、地文には単節縄文が縦位に施される。

出土遺物(第86図1・2) 1は口縁部欠損の深鉢で、地文には複節縄文が横位に施される。2は体部下半～底部欠損の深鉢で、口縁部文様帯にはボタン状貼付文に加飾された連鎖状隆帯による区画文が横位に展開する。体部には無節縄文が縦位に施される。

溝状土坑 平面形が溝状を呈する土坑で所謂「陥し穴土坑」「トラップピット(Tピット)」と呼称される土坑である(RD025～048・059～062・072・107・126・132・134・189～192・194～197・200・227・234・238)。溝状土坑は複数基で列状に構築されており、今回の調査では、第12・13次調査区より北東-南西方向に並列する土坑群(RD025～034・059～061、035～047・062、194～197)、東-西方向に並列する土坑群(RD189～192、234・238)、北西-南東方向に並列する土坑群(RD107・134)が確認された。

構築時期 溝状土坑群の構築時期は、土坑内からの一括遺物がないため断定できないが、RD028・029が縄文時代中期中葉の大木8b式期の竪穴住居跡RA006(第3図・第80図1～9・第81図)を切ることから、縄文時代中期中葉以降の土坑群であることが考えられる。溝状土坑内からの出土遺物はなかった。

遺構番号	平面形	規 模		深さ (m)	時 期
		上端 (m)	下端 (m)		
R D 001	円形	0.93	0.71	0.19	中～後期
R D 002	楕円形	2.16×1.12	1.62×0.74	0.29	後期?
R D 003	楕円形	1.82×1.24	1.25×0.75	0.63	後半期?
R D 004	円形?	1.09	0.84	0.32	後期
R D 005	円形	0.84	0.52	0.49	〃
R D 006	円形	1.09	0.58	0.64	〃
R D 007	円形	1.61	1.23	1.49	〃
R D 008	円形 (フラスコ)	0.97	0.89	0.62	〃
R D 009	円形	0.82	0.74	0.39	〃
R D 010	円形	0.92	0.78	0.58	〃
R D 011	円形 (フラスコ)	1.32	1.19	0.36	〃
R D 012	楕円形	2.09×1.16	1.54×0.46	1.12	後期
R D 013	楕円形	1.92×1.07	1.47×0.56	0.94	〃
R D 014	不整楕円形	1.29×0.86	1.13×0.36	0.53	〃
R D 015	楕円形	1.46×0.71	1.17×0.56	0.44	〃
R D 016	円形	1.33	0.98	0.62	〃
R D 017	不整円形	0.94	0.54	0.21	〃
R D 018	円形	0.91	0.83	0.35	〃
R D 019	円形	1.46	1.12	0.71	〃
R D 020	円形	0.61	0.28	0.29	〃
R D 021	楕円形	2.25×1.35	1.71×0.64	1.39	〃
R D 022	円形	1.36	0.62	0.62	〃
R D 023	楕円形	2.28×1.26	1.61×0.49	1.12	〃
R D 024	不整円形	1.06	0.91	0.54	〃
R D 025	溝状	4.11×0.51	3.24×0.09	0.65	〃
R D 026	溝状	3.56×0.57	3.46×0.12	1.36	〃
R D 027	溝状	3.45×0.56	3.43×0.12	1.38	〃
R D 028	溝状	4.12×0.59	3.46×0.13	1.11	〃
R D 029	溝状	2.98×0.37	2.56×0.11	1.33	〃
R D 030	溝状	3.35×0.69	3.16×0.16	1.42	〃
R D 031	溝状	3.47×0.66	3.14×0.19	1.26	〃
R D 032	溝状	3.89×0.61	3.48×0.17	1.23	〃
R D 033	溝状	3.68×0.34	3.53×0.09	0.72	〃
R D 034	溝状	3.03×0.42	2.88×0.07	1.02	〃
R D 035	溝状	3.68×0.59	3.43×0.12	1.16	〃
R D 036	溝状	2.92×0.71	2.76×0.11	1.28	〃
R D 037	溝状	3.72×0.67	3.58×0.18	1.49	〃
R D 038	溝状	3.23×0.44	2.37×0.08	0.97	〃
R D 039	溝状	2.27×0.27	1.86×0.08	1.27	〃
R D 040	溝状	2.99×0.38	2.77×0.12	1.08	〃
R D 041	溝状	3.69×0.59	3.34×0.11	0.79	〃
R D 042	溝状	3.17×0.61	2.59×0.19	1.16	〃
R D 043	溝状	3.24×0.67	3.08×0.08	1.13	〃
R D 044	溝状	3.28×0.59	3.06×0.09	1.38	〃
R D 045	溝状	2.65×0.39	2.54×0.07	1.14	〃
R D 046	溝状	2.68×0.56	2.43×0.12	1.32	〃
R D 047	溝状	2.53×0.46	2.36×0.08	1.18	〃
R D 048	溝状	3.27×0.52	3.18×0.14	1.34	〃
R D 049	不整円形	1.56	1.41	0.29	〃
R D 050	円形	1.07	0.84	0.09	中期?
R D 051	楕円形	1.19×0.77	0.84×0.52	0.23	後期
R D 052	円形 (フラスコ)	1.29	1.24	0.82	〃
R D 053	不整円形	1.15	0.98	0.42	〃
R D 054	円形 (フラスコ)	0.59	1.09	0.58	〃
R D 055	円形	1.31	1.13	0.24	〃

第1表 縄文時代土坑計測表1

遺構番号	平面形	規 模		深さ (m)	時 期
		上端 (m)	下端 (m)		
R D 056	円形	1.07	0.68	0.28	後期
R D 057	円形	1.71	1.64	0.29	〃
R D 058	円形	0.94	0.92	0.41	〃
R D 059	溝状	3.27×0.57	2.69×0.12	1.12	後～晩期
R D 060	溝状	3.29×0.56	2.73×0.12	1.10	〃
R D 061	溝状	3.87×0.49	3.56×0.07	1.11	〃
R D 062	溝状	2.95×0.62	2.66×0.12	0.85	〃
R D 063	不整円形	1.59	0.64	0.60	後期
R D 064	円形	1.07	0.99	0.16	〃
R D 065	円形	0.67	0.54	0.24	〃
R D 066	円形 (フラスコ)	1.06	1.19	0.86	〃
R D 067	円形	0.52	0.31	0.27	〃
R D 068	円形	1.03	0.74	0.18	〃
R D 069	円形	0.96	0.88	0.37	〃
R D 070	円形 (フラスコ)	1.50	1.71	0.55	〃
R D 071	円形 (フラスコ)	0.98	1.23	0.31	〃
R D 072	溝状	3.24×0.23	3.18×0.13	0.25	後～晩期
R D 073	円形 (フラスコ)	1.19	1.37	0.37	後期
R D 074	円形 (フラスコ)	1.41	1.73	0.71	〃
R D 075	円形	0.96	0.82	0.14	〃
R D 076	不整円形	1.26	0.74	0.69	
R D 077	不整円形	1.47	1.34	0.29	
欠番					
R D 079	円形 (フラスコ)	0.96	0.99	0.61	後期
R D 080	円形	1.28	1.04	0.42	〃
R D 081	円形	1.39	1.21	0.12	〃
R D 082	円形	1.07	1.84	0.24	〃
R D 083	円形	1.18	1.11	0.14	〃
R D 084	円形	0.94	0.72	0.17	〃
R D 085	円形	0.69	0.47	0.08	〃
R D 086	楕円形	2.03×1.29	1.34×1.15	0.21	中期?
R D 087	円形 (フラスコ)	1.42	1.84	0.98	後期
R D 088	円形	1.18	0.96	0.43	〃
R D 089	円形 (フラスコ)	1.27	1.46	0.44	〃
R D 090	円形	1.42	1.26	0.15	〃
R D 091	円形	1.35	1.19	0.46	〃
R D 092	円形 (フラスコ)	1.65	1.69	0.42	〃
R D 093	円形 (フラスコ)	1.26	1.27	0.44	〃
欠番					
R D 095	円形	1.32	1.11	0.39	後期
R D 096	不整円形	1.02	0.82	0.15	〃
R D 097	円形	1.47	1.36	0.22	〃
R D 098	円形	1.25	1.16	0.06	〃
R D 099	円形	1.07	0.95	0.14	〃
R D 100	円形	1.33	1.31	0.36	〃
R D 101	円形 (フラスコ)	1.04	1.48	1.02	〃
R D 102	円形	1.07	0.91	0.24	〃
R D 103	円形 (フラスコ)	1.75	1.77	0.62	後期
R D 104	円形 (フラスコ)	1.08	1.15	1.42	〃
欠番					
R D 106	円形 (フラスコ)	1.09	1.30	0.47	後期
R D 107	溝状	3.38×0.86	4.06×0.13	1.25	後～晩期
R D 108	円形 (フラスコ)	1.11	1.16	1.26	後期
R D 109	円形	1.62	1.47	1.22	〃
R D 110	円形 (フラスコ)	1.42	1.37	0.92	〃

第2表 縄文時代土坑計測表2

遺構番号	平面形	規 模		深さ (m)	時 期
		上端 (m)	下端 (m)		
R D 111	不整円形	1.63	1.45	0.12	
R D 112	不整円形	3.27×2.12	2.98×1.82	0.64	
R D 113	円形 (フラスコ)	1.30	1.29	0.91	後期
R D 114	不整円形	2.72	2.33	0.78	中～後期
R D 115	円形	0.96	0.73	0.22	◇
R D 116	円形	1.17	1.15	0.29	◇
R D 117	円形	0.95	0.87	0.06	◇
R D 118	円形	1.19	1.11	0.75	◇
R D 119	円形 (フラスコ)	1.21	1.31	0.67	◇
R D 120	不整円形	1.64	1.57	0.75	◇
R D 121	円形 (フラスコ)	1.91	2.04	1.13	後期
R D 122	楕円形	2.24×1.37	2.06×1.19	0.14	中期?
R D 123	円形 (フラスコ)	1.37	1.35	1.12	後期
R D 124	円形 (フラスコ)	1.18	1.32	0.79	◇
R D 125	不整円形	1.55	1.37	0.14	◇
R D 126	溝状	3.48×0.44	3.83×0.28	0.92	
R D 127	円形 (フラスコ)	1.41	1.44	0.63	後期
R D 128	円形	1.03	0.92	0.17	◇
R D 129	円形 (フラスコ)	1.76	1.82	0.67	◇
R D 130	円形 (フラスコ)	1.63	1.72	0.65	◇
R D 131	円形 (フラスコ)	1.28	1.67	1.13	◇
R D 132	溝状	3.03×0.54	2.72×0.12	0.44	◇
R D 133	円形 (フラスコ)	1.35	1.66	1.19	後～晩期
R D 134	溝状	2.48×0.38	2.97×0.11	1.07	
R D 135	円形	1.13	0.82	0.86	
R D 136	円形 (フラスコ)	1.37	1.42	1.17	後期
R D 137	円形	1.38	1.20	0.68	
R D 138	円形 (フラスコ)	1.01	0.97	0.74	後期
R D 139	円形 (フラスコ)	1.47	1.32	1.21	◇
R D 140	円形	1.28	1.15	0.91	◇
R D 141	不整円形	1.71	1.57	0.21	◇
R D 142	円形	1.46	1.20	1.37	◇
R D 143	円形 (フラスコ)	1.05	1.12	0.69	◇
R D 144	円形 (フラスコ)	1.85	1.82	0.93	◇
R D 145	円形	1.47	1.39	0.81	◇
R D 146	円形 (フラスコ)	1.66	1.47	1.04	◇
R D 147	円形	1.62	1.44	0.62	◇
R D 148	不整円形	5.53×3.24	5.42×3.08	0.45	◇
R D 149	円形	1.56	1.28	0.72	◇
R D 150	円形 (フラスコ)	1.45	1.57	0.63	◇
R D 151	円形 (フラスコ)	2.16	1.76	0.97	◇
R D 152	円形 (フラスコ)	1.18	1.21	0.87	◇
R D 153	円形 (フラスコ)	1.68	1.67	0.89	◇
R D 154	円形 (フラスコ)?	1.19	0.97	1.13	◇
R D 155	円形 (フラスコ)	1.56	1.49	0.89	◇
R D 156	円形 (フラスコ)	1.28	1.07	1.46	◇
R D 157	円形 (フラスコ)	1.13	1.22	1.31	◇
R D 158	円形 (フラスコ)	2.01	1.54	1.43	◇
R D 159	円形	0.62	0.41	0.29	◇
R D 160	円形 (フラスコ)	1.28	1.01	1.69	◇
R D 161	円形	1.18	0.89	0.48	◇
R D 162	円形	1.17	0.87	0.41	◇
R D 163	円形 (フラスコ)	1.53	1.65	1.26	◇
R D 164	円形 (フラスコ)	0.86	0.95	0.59	◇
R D 165	不整円形	1.30	1.12	0.16	◇

第3表 縄文時代土坑計測表3

遺構番号	平面形	規 模		深さ (m)	時 期
		上端 (m)	下端 (m)		
RD166	円形 (フラスコ)	1.47	1.46	0.97	後期
RD167	円形	1.98	1.67	0.78	
RD168	円形	1.21	1.14	0.72	
RD169	不整円形	1.37	1.19	0.54	
RD170	円形 (フラスコ)	1.34	1.16	0.72	後期
RD171	円形	1.18	1.07	0.51	
RD172	円形 (フラスコ)?	1.34	1.23	1.04	後期
RD173	円形 (フラスコ)?	1.33	1.61	1.38	〃
RD174	不整円形	1.32	1.04	0.58	
RD175	円形 (フラスコ)	2.02	1.49	1.18	後期
RD176	円形	0.84	0.79	0.36	〃
RD177	円形	1.36	1.01	0.74	〃
RD178	円形 (フラスコ)	1.03	1.46	0.63	〃
RD179	円形	1.55	1.27	0.66	〃
RD180	円形 (フラスコ)	1.04	1.38	0.47	〃
RD181	円形 (フラスコ)	1.27	1.29	1.01	〃
RD182	円形	1.87	1.71	1.42	〃
RD183	楕円形	1.39×0.83	1.14×0.54	0.33	
RD184	円形 (フラスコ)	0.85	1.02	0.54	後期
RD185	不整円形	1.13	0.92	0.21	
RD186	不整円形	0.54	0.41	0.12	
RD187	円形	0.87	0.78	0.18	後期
RD188	円形 (フラスコ)	0.94	0.98	0.26	〃
RD189	溝状	3.47×0.38	3.84×0.12	0.93	後～晩期
RD190	溝状	2.92×0.33	3.47×0.09	0.73	〃
RD191	溝状	2.17×0.20	2.16×0.12	0.16	〃
RD192	溝状	3.21×0.26	3.67×0.13	0.38	〃
RD193	円形 (フラスコ)	1.04	1.29	0.12	
RD194	溝状	3.61×0.23	3.32×0.06	1.01	後～晩期
RD195	溝状	3.84×0.34	3.71×0.11	1.02	〃
RD196	溝状	2.33×0.22	2.31×0.13	0.77	〃
RD197	溝状	1.53×0.27	1.42×0.08	0.64	〃
RD198	円形	1.35	1.07	0.29	後期
RD199	円形	1.53	1.42	0.18	〃
RD200	溝状	2.52×0.47	2.72×0.23	0.72	後～晩期
RD201	円形	1.24	1.09	0.13	中～後期
RD202	円形	1.02	0.83	0.35	〃
RD203	円形	1.04	0.93	0.27	〃
RD204	円形	0.75	0.46	0.33	〃
RD205	円形 (フラスコ)	1.01	1.03	1.07	〃
RD206	円形 (フラスコ)	1.03	1.17	0.74	〃
RD207	円形	1.12	1.03	0.23	〃
RD208	円形	1.23	1.14	1.17	〃
RD209	円形 (フラスコ)	1.22	1.25	1.15	〃
RD210	円形 (フラスコ)?	1.69	1.42	1.76	〃
RD211	円形 (フラスコ)	1.31	1.06	0.73	〃
RD212	円形 (フラスコ)	0.62	1.04	1.22	〃
RD213	円形 (フラスコ)	1.05	1.42	0.76	〃
RD214	円形 (フラスコ)	0.85	0.98	0.39	〃
RD215	円形 (フラスコ)	1.56	1.57	1.26	〃
RD216	不整円形	1.28	1.04	0.97	〃
RD217	円形 (フラスコ)	1.26	1.14	1.16	〃
RD218	円形	1.37	1.15	1.14	〃
RD219	円形	1.52	1.46	1.33	〃
RD220	円形 (フラスコ)	1.35	1.34	0.96	〃

第4表 縄文時代土坑計測表4

遺構番号	平面形	規 模		深さ (m)	時 期
		上端 (m)	下端 (m)		
欠番					
R D 222	円形 (フラスコ)	1.48	1.20	1.14	後期
R D 223	円形 (フラスコ)	1.73	1.12	1.27	◇
R D 224	不整円形	1.81	1.04	0.47	
R D 225	不整円形	2.35	1.64	1.36	
R D 226	不整円形	2.23	1.75	0.35	
R D 227	溝状	3.15×0.39	3.22×0.13	0.92	
R D 228	楕円形	2.03×1.04	1.75×0.44	0.71	
R D 229	円形 (フラスコ)	0.98	1.06	0.36	後期
R D 230	楕円形	1.62×0.82	1.28×0.79	0.38	
R D 231	不整円形	1.41	1.25	0.14	
R D 232	円形 (フラスコ)	0.79	0.96	0.49	後期
R D 233	不整円形	0.71	0.56	0.36	
R D 234	溝状	2.46×0.62	2.98×0.19	1.22	
R D 235	不整円形	1.33	0.99	0.29	
R D 236	不整円形	1.53	0.92	0.34	
R D 237	楕円形	1.52×1.11	1.06×0.47	0.48	
R D 238	溝状	2.31×0.43	2.52×0.19	0.62	
R D 239	円形 (フラスコ)	0.86	0.98	0.89	後期
R D 240	円形 (フラスコ)	1.74	0.94	1.31	◇
R D 241	円形	1.55	1.37	1.27	
欠番					
R D 243	円形 (フラスコ)	1.81	1.57	1.56	後期
R D 244	円形	1.75	1.26	1.39	
R D 245	円形	1.44	1.32	0.67	
R D 246	円形 (フラスコ)	1.04	1.50	0.68	後期
R D 247	楕円形?	0.99×1.02	0.85×0.83	0.26	
R D 248	円形 (フラスコ)	1.08	1.30	1.33	後期
R D 249	円形	1.57	1.17	1.61	
R D 250	円形	1.00	0.87	0.75	
R D 251	円形	1.07	0.62	0.66	
R D 252	円形	1.78	1.56	1.62	
R D 253	円形 (フラスコ)	1.33	1.56	0.99	後期
R D 254	円形	1.11	0.88	0.48	

第5表 縄文時代土坑計測表5

(3) 縄文時代の遺物包含層

縄文時代早期 (第87図1～第89図73) 1～8・10～14・21～24は器面に斜位の貝殻腹縁文が施される深鉢口縁部片である。2～4・6～8・21の口唇部は外削状を呈し、1～4・6～8・13・21には貝殻腹縁文が施される。1～4・6～8は口縁部下に数条の爪形状刺突列、5・10は原体圧痕文、11～13は横位の条痕が施される。9は口唇部が外削状を呈し、刻目文が施される深鉢口縁部片である。口縁部下には多条の平行沈線が施文される。15～17は口唇部に貝殻腹縁文が施される深鉢口縁部片で、口縁部下では多条の爪形状刺突列が平行沈線により区画される。18～20・25は口縁部下に多条の爪形状刺突列が施される深鉢口縁部片で、20は口唇部に刻目文が施文される。

26～34は横位の貝殻腹縁文に斜位の貝殻腹縁文が区画される深鉢体部片で、26～30は同一個体である。35～46・48・49・52・53・57～60・62・63は縦位の貝殻腹縁文が施される深鉢体部片で、59には未貫通の補修孔が認められる。47・50・54～56・61・64・65は斜位の貝殻腹縁文が施される深鉢体部片である。51は貝殻腹縁押引文が施される深鉢体部片である。66～71は横位の貝殻腹縁文が施される深鉢体部片である。72・73は斜位・横位の貝殻腹縁文による幾何学文が描かれる深鉢体部片である。

前期初頭 (第90図74～92) 74・75・77・78は口縁部にかけて直線的に開く深鉢口縁部片である。74は口縁部下に不整撚糸文が横位に施され、胎土に多量の繊維を含む深鉢である。78は口唇部に原体圧痕文が施される。76・79は口縁部が外反する深鉢で、地文には結束をもつ斜縄文が斜位に施される。80～92は口唇部に刻目文が施される深鉢である。

中期中葉～後葉 (第91図93～第92図111) 93・94は同一個体の深鉢口縁部片である。口唇部に刻目が施され、弁状突起を持つ。突起下には襷状の貼付文が施され、平行沈線による波状文が描かれる。95～100は隆沈線による渦巻文と懸垂文が連結して施される深鉢である。95・96・99は口縁部がラッパ状に開く深鉢で、波状口縁を呈する。95・96は体部下半～底部欠損で、95の波頂部下には孔が施される。97は波状口縁を呈するキャリパー形深鉢である。口縁部文様帯には、渦巻文・円文・長楕円文が連結して横位に展開する。98・100は口縁部～体部上半欠損の深鉢で、体部に膨らみをもつ。100の体部には大渦巻文を中心に渦巻文・円文・長楕円文が連結して施される。

101は口縁部がラッパ状に開く小形深鉢で、波状口縁を呈する。器面には隆沈線による渦巻文と懸垂文が連結して描かれ、地文には複節縄文が縦位に施される。102は底部欠損の深鉢で、波状口縁を呈する。地文には単節縄文が縦位に施される。103は体部に屈曲をもつキャリパー形深鉢口縁部で、小渦巻文を施す突起を持つ。体部には隆沈線による楕円文・懸垂文が施される。104・105・107は口縁部に小渦巻文を施す突起を持つ深鉢で、体部には隆沈線による楕円文・逆U字状文が施される。106・108・109は円文・逆U字状文が施される深鉢口縁部片で、文様区画内には地文が充填施文される。110は地文のみが施される深鉢口縁部片である。111は沈線による区画文が施される深鉢口縁部片である。

後期前葉～中葉 (第93図112～129) 112は山形状の波状口縁を呈する深鉢口縁部片である。波頂部下にはO字状の貼付文が施され、口縁部は連鎖状隆帯で区画される。113は沈線による曲線的モチーフが描かれる深鉢口縁部片である。114は波頂部に刻みをもつ深鉢口縁部片で、縄文に加飾

された複合口縁を呈する。115～120・122・124は沈線による幾何学的モチーフが施される深鉢口縁部片である。115・116は口縁部がボタン状貼付文に加飾された連鎖状隆帯により区画される。117は山形状の波状口縁を呈し、口縁部下にボタン状貼付文に加飾された連鎖状隆帯が施される。118は波頂部からボタン状貼付文が垂下する。119・120は口縁部が刺突文に加飾された隆帯により区画される。124は体部下半～底部欠損の深鉢で、波頂部に刻みをもつ。地文には無節縄文が縦位に施される。121は口唇部に小突起をもつ深鉢口縁部片で、口縁部下には平行沈線が施される。123は縄文に加飾された複合口縁上に3条の平行沈線が施される深鉢口縁部片である。125は山形状の大波状口縁を呈する深鉢口縁部片で、補修孔をもつ。器面には磨消縄文手法による幾何学文が施される。126は上部文様帯が瘤列により区画される鉢形土器片である。体部上半には刺突列に区画され、磨消縄文手法による2段の長楕円文が施される。127は無文の深鉢の体部下半～底部である。128は台付鉢の体部下半～台部で、台部は台形状を呈する。体部下半には単節縄文が縦位に施される。129は無文の台付土器の体部下半～台部である。

晩期（第93図130～132） 130は口縁部に屈曲をもつ鉢形土器口縁部片で、口縁部下には直線状羊歯状文が施される。131・132は口唇部に小突起をもつ鉢形土器口縁部片で、口縁部下には直線状羊歯状文・歯列状羊歯状文が施される。

弥生前期（第94図133～第96図180） 133～147変形工字文が施される土器群で、文様単位の節目には2個1対の粘土粒が貼付される。133～142は高坏形土器の坏部で、内面の口縁部下には数条の平行沈線が施される。143～146は台部で、143・146は台形状、144・145は樽形状を呈する。147は鉢形土器か。148は無文の鉢形土器で、口唇部に小突起をもつ。149は口縁部に屈曲をもつ甕形土器で、口唇部は小突起を持ち、沈線が施される。口頸部は無文帯となり、体部には横走縄文が施される。150は口縁部および底部欠損の甕形土器である。体部上半には沈線による曲線的モチーフが描かれ、下半には横走縄文が施される。

151～169は変形工字文が施される土器群である。151～158は高坏形土器の坏部である。159～164は台部で、数条の平行沈線に区画され、山形文・幾何学文が施される。165～169は蓋形土器で、つまみ部を欠く。170は口縁部に屈曲をもつ甕形土器で、頸部に孔が施される。器面には平行沈線による幾何学文が描かれ、文様区画内には刺突文が充填施文される。171は口唇部に小突起をもつ甕形土器で、頸部の沈線により体部と区画される。体部には横走縄文が施される。

172は口縁部が外反する甕形土器で、複合口縁を呈する。体部上半には沈線による幾何学的モチーフが描かれ、地文には横走縄文が施される。173～176は甕形土器片で、器面には沈線による幾何学文が施される。177は波頂部に刻みをもつ甕形土器の口縁部片で、頸部はくの字に屈曲する。口縁部下には円形刺突文に加飾された沈線による幾何学文が施される。178～180は口唇部に刺突文、口縁部下に平行沈線間に上下から刺突を加える交互刺突文が施される甕形土器の口縁部片である。

後期（第97図181～第98図239） 181は口唇部に小突起をもつ鉢形土器口縁部片で、口縁部下には交互刺突文・列点文が施される。182・184は附加条縄文に加飾された複合口縁を呈する甕形土器片で、さらに平行沈線または刺突文が施される。182の口縁部下には花卉状刺突文が横位に施される。183・185～195は体部に縦走または斜行する附加条縄文が施される甕形土器片である。

196～202は口縁部下に交互刺突文が施される甕形土器片で、197は退化交互刺突文である。203～211は沈線による弧状文・菱形文が施される甕形土器片で、203・207は波状口縁を呈する。

212・214～217は口縁部下に沈線による弧状文が施される甕形土器片で、212の口唇部には附加条縄文が施される。218は頸部に屈曲をもつ甕形土器体部片で、頸部に刺突列が施される。213・219～236・238・239は附加条縄文が施される甕形土器片である。237は底面に不整形な沈線文が施される甕形土器片である。

続縄文時代（第99図240～249） 240は口縁部～体部上半欠損の深鉢で、器面には帯縄文が縦位に施される。241～249は帯縄文による区画文内に、三角刺突列または円形刺突列が施される深鉢片である。241～243は口唇部下に刻みをもつ微隆起線文が横位に施される深鉢口縁部片で、241～246の帯縄文は微隆起線文に挟まれる。

(4) 平安時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡 (第8～48・54図、第100～137図)

竪穴住居跡 平安時代の竪穴住居は総数82棟 (R A 501～582) 検出された。その多くは遺跡東半部の高位面に集中しているほか (R 4・5、S 4・5、T 3・4・5区)、遺跡北西部 (P 2、Q 2区)、遺跡北部 (R 3、S 3区) にまとまりのある竪穴住居群が分布する。時期的には、9～10世紀にかけての竪穴住居跡が主であるが、竪穴住居跡埋土上部などに竪穴住居廃棄後の土器が多量に含まれる例もあった。

土 坑 柿ノ木平・堰根遺跡が立地する段丘北辺より、東-西方向に並列する土坑群 (R D 537・542～546・549・550・554～560・564・566～570・581・584～588) が検出された。形状は楕円形を呈し、埋土に白色火山灰を含むものもある。壁はほぼ直立し、底面は平坦で、断面形状が箱形を呈する特徴的な土坑である。R D 542からは完形の土師器坏が出土し、埋土に白色火山灰 (十和田 a 火山灰) を含むことなどから平安時代の土坑であることは確実と思われる。

遺 物 竪穴住居跡・土坑・溝から遺物が出土している。主な出土遺物は須恵器・土師器などの土器や鉄器等であるが、前述したように住居跡埋土上部に新しい時期の土器を多量に含むものがあり (R A 506・545・546・553・557)、住居廃棄後の窪地を利用した廃棄があったものと思われる。

土師質土器 これらの廃棄された土器の多くは酸化炎焼成による所謂「あかやき土器」の坏であるが、形状に歪みが多く、底部が厚く (1 cm 前後)、ロクロ整形痕が顕著、胎土に混和材 (砂粒など) をほとんど含まないなどの特徴があり、色調も白色に近い赤褐色を呈すこれらの土器群を「土師質土器」として区別した。また、堰根遺跡においては単独出土することが少なく、多くは住居内埋土より破片となって多量に出土する例が多い。

R A 5 0 1 竪穴住居跡 (第8図)

位 置 Q 3 区 **平 面 形** 方形 **主軸方向** E-W
規 模 東-西上端3.60m・下端3.30m、南-北上端3.88m・下端3.52m、深さ0.39m
重複関係 なし **掘 込 面** 削平 **検 出 面** II a 層上面
埋 土 A～C層に大別され、ともに竪穴埋土である。 **壁の状態** 外傾して立ち上がる
床面の状態 ほぼ平坦。南半部に床構築土 (L層) が認められ、堅くしまる。
カ マ ド カマドは東壁南寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は燃焼部より一段高い構造を呈する。規模は東壁から煙出し先端までの長さ1.55m・幅0.44m・深さ0.40mをはかる。燃焼部は角礫・円礫などの石材で構築し、褐色シルト・黄褐色粘質土・白色粘土の混合土 (K層) で石組部を補強する。芯材として土師器坏 (第100図1) が据えられている。規模は焚口-煙道基部0.69m・基底部幅0.42m・高さ0.22mをはかる。

出土遺物 (第100図1～5) 1は芯材に転用された土師器坏で、体部外面に「X」の墨書文字が認められる。内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。2は土師器小形甕で、内外面ともに口縁部にヨコナデ、体部にヘラナデが施される。底面には木葉痕が残る。3はロクロ成形による土師器坏で、内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。4は体部下半～底部欠損のあかやき土器長胴甕である。外面の体部上半には平行タタキ痕、下半にはヘラケズリ調整が施される。内面には部分的にヘラナデが認められる。5は土師器長胴甕で、体部には輪積みによる凹凸が

認められる。外面の口縁部～体部下端にはヘラケズリ調整、内面の口縁部にはヨコナデ、体部上半および下端にはヘラナデ・ヘラケズリ調整が施される。底面には木葉痕が残る。

R A 5 0 2 竪穴住居跡（第8図）

位置 Q3区 **平面形** 方形 **主軸方向** E9°S
規模 南東－北西上端2.85m・下端2.46m、北東－南西上端2.73m・下端2.48m、深さ0.46m
重複関係 不明 **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋土 A～C層に大別され、ともに竪穴埋土である。
壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められる。
カマド カマドは南東壁南寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は燃焼部から煙出部へ向かって緩やかに傾斜する。規模は南東壁から煙出し先端までの長さ1.38m・幅0.41m・深さ0.41～0.68mをはかる。燃焼部は礫を芯材として構築され、規模は焚口－煙道基部0.65m・基底部幅0.34m・高さ0.22mをはかる。
出土遺物（第100図6・7） 6は体部下半～底部欠損のあかやき土器長胴甕で、体部上半には内外面ともにカキメが施される。外面の体部下半にはヘラケズリ調整が施される。7は土師器鉢で、内外面にヘラミガキが施される。

R A 5 0 3 竪穴住居跡（第9図）

位置 Q3区 **平面形** 方形 **主軸方向** E-W
規模 東－西上端3.48m・下端3.27m、北－南上端3.85m・下端3.56m、深さ0.23m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋土 A～C層に大別される。A・B層は竪穴埋土、C層は貯蔵穴埋土である。
壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められる。
カマド カマドは東壁南寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は燃焼部から煙出部へ向かって緩やかに傾斜する。規模は東壁－煙出し先端1.80m・幅0.40～0.72m・深さ0.35mをはかる。燃焼部は礫を芯材として構築し、規模は焚口－煙道基部0.55m・基底部幅0.68m・高さ0.20m（カマド残存部）をはかる。
出土遺物（第101図1～4） 1は底部欠損の土師器甕で、内外面の口縁部および外面体部にヘラミガキが施される。体部内面にはヘラケズリ調整が施され、部分的にヘラナデが認められる。2・3はロクロ成形による須恵器坏で、底部切り離しは回転糸切無調整である。4は口縁部～体部上半欠損のあかやき土器甕で、内外面ともにヘラケズリ調整が施される。部分的にヘラナデが認められる。

R A 5 0 4 竪穴住居跡（第9図）

位置 P2区 **平面形** 方形 **主軸方向** E8°S
規模 南東－北西上端4.73m・下端4.44m、北東－南西上端4.80m・下端4.41m、深さ0.49m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
壁の状態 外傾して立ち上がる
埋土 A～E層に大別される。A～C層は竪穴埋土、D・E層は貯蔵穴・ピット埋土である。

床面の状態 平坦。ほぼ全面に床構築土（L層）が認められ、堅くしまる。

カマド カマドは南東壁南寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は燃焼部より一段高い構造を呈し、側面は角・円礫による石組みで補強される。規模は南東壁から煙出し先端までの長さ1.67m・石組み内の幅0.16～0.74m・深さ0.51mをはかる。燃焼部は礫を芯材として構築し、褐色シルト・粘質土の混合土（K層）で石組部を補強する。規模は焚口ー煙道基部0.81m・基底部幅0.73m・高さ0.38m（カマド残存部）をはかる。

出土遺物（第101図5～12） 5・6・11はロクロ成形の土師器坏で、内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。6の体部下端～底部全面には回転ヘラケズリ調整が施される。11の底面には「主」の墨書文字が認められる。7～10はロクロ成形のあかやき土器坏で、7の体部下半には「下」の墨書文字が認められる。9・12はあかやき土器長胴甕で、12の体部外面にはカキメが認められ、下半にはともにヘラケズリ調整が施される。12の底面には多量の砂が付着する。13は刀子の茎で、木質部が残存している。

RA505 竪穴住居跡（第10図）

位置 R3区 **平面形** 方形 **主軸方向** E6°S

規模 東ー西上端2.88m・下端2.65m、北ー南上端3.26m・下端3.03m、深さ0.17m

重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面

壁の状態 外傾して立ち上がる

埋土 A・B層に大別され、ともに竪穴・周溝埋土である。A₁層は微量の白色火山灰を含む。

床面の状態 ほぼ平坦。全面に床構築土（L層）が認められ、堅くしまる。

カマド カマドは南東壁中央に位置する。煙道平面形は溝状で、底面は燃焼部より一段高い構造を呈する。規模は南東壁から煙出し先端までの長さ1.66m・幅0.44m・深さ0.14mをはかる。燃焼部は角・円礫などの石材で構築し、褐色シルト・粘質土の混合土（K層）で石組部を補強する。芯材としてあかやき土器坏・土師器坏（第102図1・2）が重ねて据えられている。規模は焚口ー煙道基部0.76m・基底部幅0.42m・高さ0.33m（カマド残存部）。

出土遺物（第102図1・2） 1はロクロ成形のあかやき土器坏で、底部切り離しは静止糸切無調整である。2はロクロ成形の土師器坏で、体部下端に手持ちヘラケズリ調整が施される。内面には黒色処理およびヘラミガキが施される。

RA506（新旧）竪穴住居跡（第11図）

位置 Q3区 **平面形** 方形 **主軸方向** E-W

規模 東ー西上端3.52m・下端3.23m、北ー南上端4.02m・下端3.65m、深さ0.37m

重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面

埋土 A～F層に大別され、A₄・A₅層は微量の白色火山灰を含む。

壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められる。

カマド カマドは新旧2時期あり、新期のカマドは東壁中央に位置する。煙道平面形は溝状で、底面は燃焼部や煙出部より一段高い構造を呈し、側面は角・円礫による石組みで補強される。規模は東壁から煙出し先端までの長さ1.07m・石組み内の幅0.17～0.38m・深さ0.27～0.60mをはかる。燃焼部はカマド基底部のみが残存し、規模は焚口ー煙道基部0.58m・基底部幅0.64m・高

さ0.40m（カマド残存部）をはかる。旧期のカマドは南壁東寄りに位置し、煙道および煙出部が残存する。規模は南壁から煙出し先端までの長さ1.22m・幅0.62m・深さ0.32mをはかる。

柱 穴 P 1～5が床面より検出されている。主柱穴は4口（P 1～3・5）が相当し、柱痕跡が認められる。各柱穴の床面からの深さは次のとおりである。P 1 -0.47m・P 2 -0.37m・P 3 -0.40m・P 4 -0.21m・P 5 -0.45m

出土遺物（第102図3～6） 3・4はロクロ成形の土師器坏で、内面には黒色処理およびヘラミガキが施される。3の体部外面には「寺」の墨書文字が認められる。5・6はともに底部欠損でロクロ成形の土師質土器で、5は口縁部が直立する坏、6は小皿である。

R A 5 0 7 竪穴住居跡（第10図）

位 置 R 3区 **平面形** 方形？ **主軸方向** N 5° W

規 模 北-南上端4.65m・下端4.24m、西-東上端1.35m以上・下端1.40m以上、深さ0.39m

重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面

埋 土 A～C層に大別され、A・B層は竪穴埋土、C層はピット埋土である。A層は白色火山灰の混入量により3層に細分され、A₂層には多量に混入する。

壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められる。

出土遺物（第102図7） 7は口縁部が直立するロクロ使用の土師質土器坏で、底部を欠く。

R A 5 0 8 竪穴住居跡（第12図）

位 置 P 3区 **平面形** 方形 **主軸方向** E 15° N

規 模 北東-南西上端3.20m以上・下端2.98m以上、
北西-南東上端2.06m以上・下端1.90m以上、深さ0.41m

重複関係 R A 509に切られる **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面

埋 土 A層は竪穴埋土である。 **壁の状態** 外傾して立ち上がる

床面の状態 ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められる。 **出土遺物** 焼失

カマド カマドは北東壁に位置し、煙道および煙出部が残存する。煙道平面形は溝状で、底面は燃焼部や煙出部より一段高い構造になっている。規模は北東壁から煙出し先端までの長さ1.67m・幅0.21～0.38m・深さ0.16～0.43mをはかる。

R A 5 0 9 竪穴住居跡（第12図）

位 置 P 3区 **平面形** 方形 **主軸方向** E 15° N

規 模 北東-南西上端3.70m・下端3.23m、北西-南東上端4.19m・下端3.78m、深さ0.49m

重複関係 R A 508を切る **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面

埋 土 A～F層に大別され、A～C層は竪穴埋土、D～F層は周溝・ピット埋土である。

壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められる。

カマド カマドは新旧2時期あり、新期のカマドは北東壁中央南端に位置する。煙道平面形は溝状で、側面は角・円礫による石組みで補強される。規模は北東壁から煙出し先端までの長さ1.02m・石組み内幅0.15～0.39m・深さ不明（罹災）をはかる。燃焼部の石組みは破壊され、火床面のみ残存する。旧期のカマドは北東壁南寄りに位置し、煙道および煙出部が残存する。規模は北

東壁から煙出し先端までの長さ1.54m・幅0.20～0.36m・深さ0.27m以上をはかる。

出土遺物(第102図8～11) 8は須恵器坏で、体部外面に墨書文字が認められる。9はロクロ成形のあかやき土器坏で、底部切り離しは回転糸切無調整である。10は須恵器瓶の体部下半～底部か。外面の体部下半～底面にかけてヘラケズリ調整が施される。11はあかやき土器長胴甕で、外面の体部下半にはヘラケズリ調整が施される。

R A 5 1 0 竪穴住居跡(第12図)

位置 R 3 区 **平面形** 方形 **主軸方向** E-W
規模 東-西上端3.92m以上・下端3.82m以上、北-南上端3.63m・下端3.45m、深さ0.18m
重複関係 R D 1030に切られる **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋土 A～D層に大別され、ともに竪穴・周溝埋土である。A₁層は微量の白色火山灰を含む。
壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土(L層)が認められる。
カマド カマドは後世の攪乱により破壊され、東壁中央付近に燃焼部のカマド基底部のみ残存する。図示していないが、芯材としてあかやき土器坏が据えられている。規模は基底部幅0.76m・高さ0.12m(カマド残存部)をはかる。

出土遺物(第103図1・2) 1はロクロ成形のあかやき土器坏で、底部切り離しは回転糸切無調整である。2は土師器坏で、体部下端～底部全面に回転ヘラケズリ調整が施される。内面には黒色処理およびヘラミガキが施される。

R A 5 1 1 竪穴住居跡(第13図)

位置 R 3 区 **平面形** 方形 **主軸方向** E 7° N
規模 東-西上端4.25m以上・下端4.13m、北-南上端4.69m・下端4.50m、深さ0.12m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋土 A～D層に大別され、A～C層は竪穴・周溝埋土、D層はピット埋土である。
壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土(L層)が認められる。
カマド カマドは後世の攪乱により破壊され、北東壁南寄りに燃焼部の火床面のみ残存する。

出土遺物(第103図3) 3は土師器坏で、底面に手持ちヘラケズリ調整が施される。内面には黒色処理およびヘラミガキが施される。

R A 5 1 2 竪穴住居跡(第13図)

位置 R 3 区 **平面形** 方形 **主軸方向** N-S
規模 北-南上端2.32m・下端2.18m、西-東上端2.30m以上・下端1.88m、深さ0.48m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋土 A～D層に大別され、A～C層は竪穴埋土、D層は貯蔵穴・ピット埋土である。
壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦
カマド カマドは後世の攪乱により破壊され、北壁に燃焼部のカマド基底部と火床面のみ残存する。規模は焚口-煙道基部0.56m・基底部幅0.56mをはかる。

出土遺物 図示していないが、土師器甕、須恵器大甕・長頸瓶の小片が出土している。

R A 5 1 3 竪穴住居跡 (第14図)

位置 R 3区 **平面形** 方形 **主軸方向** N17° W
規模 北西-南東上端2.98m・下端2.70m、
北東-南西上端1.08m以上・下端0.93m以上、深さ0.35m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋土 A~D層に大別され、A~C層は竪穴・周溝埋土、D層はピット埋土である。
壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土 (L層) が認められる。
出土遺物 (第103図4~6) 4はロクロ成形の土師質土器坏、5・6は土師質土器小皿で、底部切り離しは回転糸切無調整である。

R A 5 1 4 竪穴住居跡 (第14図)

位置 R 4区 **平面形** 方形 **主軸方向** N 8° E
規模 北-南上端3.29m・下端3.12m、西-南上端3.14m以上・下端2.99m以上、深さ0.38m
重複関係 R H1001に切られる **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋土 A~F層に大別され、A₁・B₁層には多量の白色火山灰が混入する。
壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土 (L層) が認められる。
柱穴 P 1~4が床面より検出されている。主柱穴は3口 (P 1~3) が相当し、柱痕跡が認められる。各柱穴の床面からの深さは次のとおり。P 1-0.49m・P 2-0.49m・P 3-0.65m・P 4-0.25m
出土遺物 (第103図7~9) 7・8は土師器坏で、内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。8の体部下端には墨書文字が認められ、「二」。9はあかやき土器小形壺の口縁部~肩部である。

R A 5 1 5 竪穴住居跡 (第15図)

位置 R 4区 **平面形** 方形 **主軸方向** S 7° E
規模 南-北上端5.22m・下端4.84m、東-西上端5.08m・下端4.72m、深さ0.43m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面 **壁の状態** 外傾して立ち上がる
埋土 A~D層に大別される。A層およびB層上層は微量の白色火山灰を含む。
床面の状態 部分的に床構築土 (L層) が認められるが、床面は廃棄前に大きく掘削されている。
カマド カマドは南壁東寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は燃烧部から徐々に浅くなるが煙出部では一段深くなる。規模は南壁-煙出し先端1.48m・幅0.46m・深さ0.05~0.32mをはかる。燃烧部は礫を芯材として構築し、規模は焚口-煙道基部0.53m・基底部幅0.42m・高さ0.53m (カマド残存部) をはかる。
柱穴 P 1~3が床面より検出されている。いずれも主柱穴に相当し、柱痕跡が認められる。各柱穴の床面からの深さは次のとおりである。P 1-0.47m・P 2-0.47m・P 3-0.37m
出土遺物 (第103図10~13) 10はロクロ成形のあかやき土器坏である。11~13は土師器坏で、12の体部外面には墨書文字が認められるが、判読不明である。内面には黒色処理およびヘラミガキが施される。

R A 5 1 6 竪穴住居跡 (第15図)

位置 R 4区 **平面形** 方形 **主軸方向** N18° W
規模 北西-南東上端3.61m・下端3.45m、
南西-北東上端1.51m以上・下端1.43m以上、深さ0.22m
重複関係 R D025・026を切る **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋土 A～C層に大別され、A・B層は竪穴埋土、C層はピット埋土である。
壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土 (L層) が認められる。
出土遺物 図示していないが、土師器坏が出土している。

R A 5 1 7 竪穴住居跡 (第16図)

位置 R 4区 **平面形** 方形 **主軸方向** E11° N
規模 北東-南西上端5.42m・下端5.18m、北西-南東上端5.53m・下端5.25m、深さ0.37m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋土 A～F層に大別され、A₁層は微量の白色火山灰を含む。
壁の状態 外傾して立ち上がる
床面の状態 ほぼ平坦。全面に床構築土 (L層) が認められ、中央部付近は堅くしまる。
カマド カマドは新旧2時期あり、新期カマドは北東壁南寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は燃焼部より一段高い構造を呈し、側面は角・円礫による石組みで補強される。規模は北東壁から煙出し先端までの長さ1.47m・石組み内の幅0.22～0.37m・深さ0.37mをはかる。燃焼部は北側のカマド基底部のみが残存し、規模は焚口-煙道基部0.45m・高さ0.35m (カマド残存部) をはかる。旧期カマドは新期カマド南隣りに位置し、煙道および煙出部が残存する。規模は北東壁から煙出し先端までの長さ0.81m・石組み内の幅0.33m・深さ0.19～0.57mをはかる。
柱穴 P 1～6が床面より検出されており、主柱穴は3口 (P 1～3) が相当する。各柱穴の床面からの深さは次のとおりである。P 1 -0.47m・P 2 -0.52m・P 3 -0.48m・P 4 -0.23m・P 5 -0.35m・P 6 -0.22m
出土遺物 (第104図1～6) 1は須恵器坏で、底部切り離しは回転糸切無調整である。2～4は土師器坏で、内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。5は口縁部にかけて直線的に開く厚手の土師器甕で、内外面にヘラナデが施される。6はあかやき土器長胴甕で、体部外面にヘラケズリ調整が施されるが、部分的にヘラミガキ様の細かい単位が認められる。

R A 5 1 8 竪穴住居跡 (第17図)

位置 R 5区 **平面形** 方形 **主軸方向** S19° E
規模 南東-北西上端5.31m・下端4.99m、北東-南西上端5.23m・下端4.84m、深さ0.32m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋土 A～E層に大別され、A₁層は微量の白色火山灰を含む。
壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。全面に床構築土 (L層) が認められる。
カマド カマドは南東壁東寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は燃焼部や煙出部より一段高い構造を呈する。規模は南東壁-煙出し先端1.77m・幅0.48m・深さ0.17～0.33mをはかる。燃焼部は礫を芯材として構築し、規模は焚口-煙道基部0.86m・基底部幅0.36m・高さ0.34m

(カマド残存部)をはかる。

柱 穴 P 1～5が床面より検出されている。主柱穴は4口(P 1・3～5)が相当し、柱痕跡が認められる。各柱穴の床面からの深さは次のとおりである。P 1-0.58m・P 2-0.13m・P 3-0.53m・P 4-0.61m・P 5-0.40m

出土遺物(第104図7) 7は土師器坏で、内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。

R E 5 1 9 竪穴跡(第17図)

位 置 R 5区 **平面形** 方形 **主軸方向** N20° E
規 模 北東-南西上端1.95m・下端1.80m、北西-南東上端1.78m・下端1.68m、深さ0.22m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋 土 A～D層に大別され、A層は微量の白色火山灰、C層は多量の焼土・炭化物を含む。
壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土(D層)が認められる。
出土遺物 図示していないが、あかやき土器高台付坏が出土している。

R E 5 2 0 竪穴跡(第18図)

位 置 R 5区 **平面形** 方形 **主軸方向** W 8° N
規 模 西-東上端3.15m・下端2.78m、南-北上端2.74m・下端2.35m、深さ0.28m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面 **埋 土** A～C層に大別される。
壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦

出土遺物(第105図1～11) 1～5はあかやき土器坏で、底部切り離しは回転糸切無調整である。5は回転糸切後に体部下端～底面周縁にかけて手持ちヘラケズリ調整施される。6～10は土師器坏、11は土師器高台付坏で、内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。7の体部下端～底面には手持ちヘラケズリ調整が施される。

R A 5 2 1 竪穴住居跡(第18図)

位 置 R 5区 **平面形** 方形 **主軸方向** S 15° W
規 模 南西-北東上端3.66m・下端3.30m、南東-北西上端3.47m・下端3.00m、深さ0.32m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋 土 A～E層に大別され、ともに周溝・竪穴埋土である。A₂層は微量の白色火山灰を含む。
壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。全面に床構築土(L層)が認められる。
カマド カマドは南西壁東寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は燃焼部より一段高い構造を呈する。規模は南西壁から煙出し先端までの長さ1.28m・幅0.16～0.53m・深さ0.26mをはかる。燃焼部は礫を芯材として構築し、規模は焚口-煙道基部0.58m・基底部幅0.42m・高さ0.34m(カマド残存部)をはかる。

出土遺物(第105図12～14) 12はロクロ成形のあかやき土器坏で、底部切り離しは回転糸切無調整である。13・14は土師器坏で、内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。13の体部下端～底面周縁には回転ヘラケズリ調整が施される。

RA522 竪穴住居跡 (第19図)

- 位置** S4区 **平面形** 方形 **主軸方向** E15° N
- 規模** 東-西上端4.14m・下端3.90m、北-南上端4.52m・下端4.23m、深さ0.32m
- 重複関係** 不明 **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
- 埋土** A~D層に大別され、A・B層は竪穴埋土、D層は貯蔵穴・ピット埋土である。A層には白色火山灰が層状に堆積する。
- 壁の状態** 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほほ平坦。全面に床構築土(L層)が認められる。
- カマド** カマドは北東壁南寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は煙出部が一段低い構造を呈する。規模は北東壁から煙出し先端までの長さ2.02m・幅0.52m・深さ0.32~0.44mをはかる。燃烧部は角・円礫などの石材で構築し、褐色シルト・粘質土混合土(K層)で石組部を補強する。芯材としてあかやき土器坏(第106図1)が据えられている。規模は焚口-煙道基部0.38m・基部幅0.35m・高さ0.35m(カマド残存部)をはかる。
- 施設等** 床面より貯蔵穴を5基検出した。各貯蔵穴の規模は次のとおりである。
- 貯蔵穴1-長軸1.08m・短軸0.81m・床面からの深さ0.39m
 - 貯蔵穴2-長軸0.78m・短軸0.60m・床面からの深さ0.26m
 - 貯蔵穴3-長軸1.03m・短軸0.97m・床面からの深さ0.53m
 - 貯蔵穴4-長軸0.60m・短軸0.52m・床面からの深さ0.51m
 - 貯蔵穴5-長軸0.72m・短軸0.64m・床面からの深さ0.32m

出土遺物(第106図1~3) 1はロクロ成形のあかやき土器坏で、底部切り離しは回転糸切無調整である。2は土師器坏で、外面の体部下半に「下」の刻書文字が認められる。体部下端~底面には回転ヘラケズリ調整、内面には黒色処理およびヘラミガキが施される。3はあかやき土器長胴甕で、内外面の体部下半はヘラナデ後にタタキ整形が行われる。

RA523 竪穴住居跡 (第19図)

- 位置** S4区 **平面形** 方形 **主軸方向** E17° N
- 規模** 北東-南西上端3.22m・下端3.07m、
北西-南東上端3.75m以上・下端3.68m以上、深さ0.12m
- 重複関係** RD527・RG1013に切られる **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
- 埋土** A~F層に大別され、A~D層は竪穴・貯蔵穴埋土、E・F層はピット埋土である。
- 壁の状態** 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほほ平坦。全面に床構築土(L層)が認められる。
- カマド** カマドは北東壁南寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は煙出部が一段低い構造を呈する。規模は北東壁から煙出し先端までの長さ1.33m・幅0.47m・深さ0.09mをはかる。燃烧部は後世の削平により破壊され、火床面のみ残存する。芯材としてあかやき土器小形甕(第106図5)を2点並べて据えている。
- 出土遺物(第106図4~6)** 4は土師器鉢で、外面の体部下半にヘラナデ、内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。底面にはヘラケズリ調整が施されるが、部分的にヘラナデが認められる。5はあかやき土器小形甕で、体部外面にヘラケズリ調整が施される。6はロクロ成形のあかやき土器坏で、底部切り離しは回転糸切無調整である。

R A 5 2 4 竪穴住居跡（第20図）

- 位 置** S 5 区 **平 面 形** 方形 **主軸方向** E-W
- 規 模** 東-西上端3.23m・下端2.99m、北-南上端3.78m・下端3.53m、深さ0.48m
- 重複関係** なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
- 埋 土** A～C層に大別され、A₁・A₂層には白色火山灰が混入する。
- 壁の状態** 外傾して立ち上がる
- 床面の状態** ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められ、堅くしまる。
- カマド** カマドは東壁南寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は燃焼部や煙出部より一段高い構造を呈する。規模は東壁から煙出し先端までの長さ1.87m・幅0.27～0.39m・深さ0.32～0.40mをはかる。燃焼部は角・円礫などの石材で構築し、褐色シルト・粘質土の混合土（K層）で石組部を補強する。芯材としてあかやき土器小形甕（・第106図8）が据えられている。規模は焚口-煙道基部0.66m・基底部幅0.55m・高さ0.21～0.44mをはかる。
- 出土遺物（第106図7・8）** 7は台部欠損の土師器高台付坏で、内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。8はロクロ成形のあかやき土器小形甕である。

R A 5 2 5 竪穴住居跡（第21図）

- 位 置** S 4・5 区 **平 面 形** 方形 **主軸方向** E-W
- 規 模** 東-西上端6.40m・下端6.00m、北-南上端8.35m・下端7.92m、深さ0.31m
- 重複関係** 不明 **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面 **壁の状態** 外傾して立ち上がる
- 埋 土** A～D層に大別される。
- 床面の状態** ほぼ平坦。壁際を中心に床構築土（L層）が認められ、南東部付近は堅くしまる。
- カマド** カマドは後世の削平により破壊され、煙道と燃焼部のみ残存する。東壁南寄りに位置し、底面は燃焼部へ向かって緩やかに傾斜する。規模は東壁から煙出し先端までの長さ0.48m・幅0.78m・深さ0.26mをはかる。燃焼部は礫を芯材として構築し、規模は焚口-煙道基部0.95m・基底部幅0.48m・高さ0.35m（カマド残存部）をはかる。
- 柱 穴** P 1～7が床面より検出されている。主柱穴は6口（P 1～6）が相当し、柱痕跡が認められる。各柱穴の床面からの深さは次のとおりである。P 1-0.64m・P 2-0.59m・P 3-0.50m・P 4-0.58m・P 5-0.52m・P 6-0.48m・P 7-0.33m
- 施設等** 貯蔵穴が5基検出され、多量の遺物が出土している。各貯蔵穴の規模は次のとおりである。
- 貯蔵穴 1 - 長軸0.88m・短軸0.79m・床面からの深さ0.58m
 - 貯蔵穴 2 - 長軸1.92m・短軸1.44m・床面からの深さ0.55m
 - 貯蔵穴 3 - 長軸1.48m・短軸1.22m・床面からの深さ0.59m
 - 貯蔵穴 4 - 長軸1.75m・短軸1.02m・床面からの深さ0.39m
 - 貯蔵穴 5 - 長軸1.10m・短軸1.08m・床面からの深さ0.28m
- 出土遺物（第107図1～第108図26）** 1・2・4～6・8・9・12～14・21・22は土師器坏、3・10・15・23は土師器高台付坏、24は土師器高台付皿で、内面または内外面に黒色処理およびヘラミガキが施される。1の体部下半～底面には手持ちヘラケズリ調整が施される。2・9・14・24の口縁部は外反する。8の体部下半には外面にヘラケズリ調整、内面にヘラナデが施される。

12の底面にはヘラナデによる再調整が施される。21の体部外面にはヘラケズリ調整後ヘラナデが施される。7・16・18は体部下半～底部欠損の土師器甕で、口縁部は短く外反する。7・18の口縁部には内外ともにヨコナデ、体部外面にはヘラケズリ調整、内面にはヘラナデが施される。16の口縁部には外面に指頭による整形痕、内面にヨコナデが認められ、体部には輪積みによる凹凸が残る。体部外面にはヘラケズリ調整、内面には深いナデが施される。11はあかやき土器高台付坏で、口縁部～体部上半および台部を欠く。17はロクロ成形のあかやき土器小形甕、20はあかやき土器坏である。19はあかやき土器高台付皿または耳皿の台部か。25・26は土師器小形甕で、口縁部は短く外反し、26の頸部には軽い段が認められる。体部内面にはともにヘラナデが施される。25の口縁部および体部には補修孔が認められ、体部外面にはヘラミガキが施される。26の口縁部外面にはヨコナデ後に指頭による整形痕、内面にヘラミガキが認められる。体部外面にはヘラケズリ調整が施される。

RA526 竪穴住居跡 (第20図)

位置 S5区 **平面形** 方形 **主軸方向** S-N
規模 南-北上端3.23m・下端2.73m、東-西上端3.28m・下端2.91m、深さ0.32m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋土 A～D層に大別され、ともに竪穴埋土である。A₂層は微量の白色火山灰を含む。
壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。全面に床構築土(L層)が認められる。
カマド カマドは後世の削平により破壊され、煙道と火床面のみ残存する。南壁東寄りに位置し、底面は燃焼部へ向かって緩やかに傾斜する。規模は南壁から煙出し先端までの長さ0.67m・幅0.43m・深さ0.20mをはかる。

出土遺物 (第108図27～29) 27・28は土師器坏で、28は底部を欠く。内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。29はロクロ成形のあかやき土器坏体部片である。

RA527 竪穴住居跡 (第22図)

位置 S5区 **平面形** 方形 **主軸方向** S-N
規模 南-北上端2.90m・下端2.44m、東-西上端3.06m・下端2.52m、深さ0.35m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋土 A～C層に大別され、ともに竪穴埋土である。 **壁の状態** 外傾して立ち上がる
床面の状態 ほぼ平坦。全面に床構築土(L層)が認められ、南東部付近は強くしまる。
カマド カマドは南壁東寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は煙出部へ向かって緩やかに傾斜する。天井部は褐色シルト・粘質土の混合土(K層)を補強材として、土師器長胴甕(・第108図30)を利用して構築される。規模は南壁-煙出し先端1.04m・幅0.38m・深さ0.37～0.48mをはかる。燃焼部はカマド基底部のみが残存し、芯材として土師器甕が据えられている。規模は焚口-煙道基部0.38m・基底部幅0.31m・高さ0.17m(カマド残存部)をはかる。

出土遺物 (第108図30) 30は土師器長胴甕で、口縁部は短く外反し、内外ともにヨコナデが施される。体部外面にヘラケズリ調整、内面にヘラナデが施される。底面には多量の砂が付着する。

RA528 竪穴住居跡 (第23図)

- 位置** S5区 平面形 方形 主軸方向 E-W
- 規模** 東-西上端5.67m・下端5.44m、北-南上端6.74m・下端6.50m、深さ0.29m
- 重複関係** RA529を切る 掘込面 削平 検出面 II a層上面
- 埋土** A~F層に大別され、A~C層は竪穴・貯蔵穴埋土、D~F層はピット埋土である。
B層-炭化した住居の建築部材(組材・壁板材)など多量の焼土・炭化材を含む。焼失住居か。
C層-貯蔵穴埋土(C₂層)は微量の白色火山灰を含む。
- 壁の状態** 外傾して立ち上がる。南壁中央部には床面に向かって緩やかに傾斜するスロープ状の堅い面が認められ、出入口と考えられる。
- 床面の状態** ほぼ平坦。全面に床構築土(L層)が認められ、南半部付近は堅くしまる。
- カマド** カマドは東壁南寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は煙道中位で最も高くなる構造を呈する。規模は東壁-煙出し先端1.70m・幅0.41m・深さ0.11~0.50m。燃燒部は礫を芯材として構築し、規模は焚口-煙道基部0.85m・基底部幅0.80m・高さ0.40m(カマド残存部)。
- 柱穴** P1~4が床面より検出されている。主柱穴は2口(P1・2)が相当し、柱痕跡が認められる。各柱穴の床面からの深さは次のとおり。P1-0.47m・P2-0.57m・P3-0.35m・P4-0.40m
- 遺物の出土状況** 床面より矢印状に組み合わせた2本1対の銚(第110図12・13)・鋤先(第110図14)などが検出された。武器・農耕具・漁労具など数多くの鉄製品のほか、フイゴの羽口・塊形鉄滓・砥石も合わせて出土しており、小規模な鍛冶が行われていたことが考えられる。
- 出土遺物(第109図1~第110図33)** 1~5はロクロ成形のあかやき土器坏で、底部切り離しは回転糸切無調整である。6・7は土師器坏で、内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。8は底部欠損の須恵器長頸壺で、外面には体部下半にヘラケズリ調整後、頸部~体部上半にヘラナデが施される。内面にはハケメが施される。9は口縁部~体部上半欠損の須恵器甕で、内外面にタタキ痕が認められる。10は鎌の基部か。11は紡錘車である。12・13は内湾するの逆刺をもつ銚で、断面は方形を呈する。14は鋤先でU字形を呈し、内側に木製の風呂を装着するための受け口溝をもつ。15~20は用途不明の棒状鉄製品である。21は完形の刀子である。22は板状を呈する手鎌で、両端部に孔が認められる。23は断面が方形を呈する棒状鉄製品で、長さ23.2cmをはかる。24は釣針?、25は菊座を呈する座金?、26は兜金、27は足金物?、28・33は用途不明の棒状鉄製品、29は切羽、30は合釘?、31・32は断面が円形を呈する棒状鉄製品である。

RA529 竪穴住居跡 (第22図)

- 位置** S5区 平面形 方形 主軸方向 E-W
- 規模** 東-西上端5.50m・下端5.21m、北-南上端6.28m・下端5.88m、深さ0.38m
- 重複関係** RA528に切られる 掘込面 削平 検出面 II a層上面
- 埋土** A~G層に大別され、A₁層は微量の白色火山灰を含む。
- 壁の状態** 外傾して立ち上がる 床面の状態 平坦。壁際を中心に床構築土(L層)が認められる。
- カマド** カマドは東壁南寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は燃燒部や煙出部より一段高い

構造を呈する。規模は東壁－煙出し先端1.58m・幅0.52m・深さ0.08～0.20mをはかる。燃烧部は後世の削平により破壊され、カマド基底部のみが残存する。規模は焚口－煙道基部1.08m・基底部幅0.62m・高さ0.23m（カマド残存部）をはかる。

柱 穴 P 1～6が床面より検出されている。各柱穴の床面からの深さは次のとおりである。P 1－0.33m・P 2－0.54m・P 3－0.31m・P 4－0.28m・P 5－0.39m・P 6－0.32m

出土遺物（第111図1～4） 1はロクロ成形のあかやき土器皿で、底部切り離しは回転糸切無調整である。2・3は土師器坏で、内面には黒色処理およびヘラミガキが施される。2の体部下端にはヘラケズリ調整が施される。4は体部下半～底部欠損のあかやき土器長胴甕で、体部外面にはヘラケズリ調整が施される。

R A 5 3 0 竪穴住居跡（第24図）

位 置 S 5区 **平面形** 方形 **主軸方向** E 19° S
規 模 南東－北西上端5.37m・下端4.98m、北東－南西上端6.30m・下端6.02m、深さ0.48m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋 土 A～E層に大別される。A・B層には白色火山灰が混入し、特にB₁層は多量に含む。
壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。全面に床構築土（L層）が認められる。
カマド カマドは南東壁南寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は燃烧部や煙出部より一段高い構造を呈する。側面は角・円礫による石組みで補強される。規模は南東壁－煙出し先端1.38m・石組み内の幅0.25m・深さ0.24～0.38mをはかる。燃烧部は礫を芯材として構築し、規模は焚口－煙道基部1.23m・基底部幅0.31m・高さ0.46m（カマド残存部）をはかる。
柱 穴 P 1～7が床面より検出されている。主柱穴は3口（P 1～3）が相当し、柱痕跡が認められる。主柱穴の床面からの深さは次のとおりである。P 1－0.45m・P 2－0.50m・P 3－0.39m
出土遺物（第111図5～12） 5～11はロクロ成形あかやき土器坏で、底部切り離しは回転糸切無調整である。12は刀子で、切先および茎尻を欠く。

R A 5 3 1 竪穴住居跡（第24図）

位 置 S 5区 **平面形** 方形 **主軸方向** E－W
規 模 東－西上端3.20m・下端3.09m、北－南上端3.28m・下端3.16m、深さ0.12m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋 土 A～C層に大別され、A層は竪穴埋土、B・C層は貯蔵穴埋土である。
壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。全面に床構築土（L層）が認められる。
カマド カマドは後世の削平により破壊され、東壁南寄り付近に燃烧部の火床面のみ残存する。
出土遺物 図示していないが、あかやき土器坏・長胴甕が出土している。

R A 5 3 2 竪穴住居跡（第25図）

位 置 S 5区 **平面形** 方形 **主軸方向** S－N
規 模 南－北上端2.90m・下端2.69m、東－西上端3.00m・下端2.80m、深さ0.13m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面 **壁の状態** 外傾して立ち上がる

る

埋 土 A～C層に大別され、A・B層は堅穴・貯蔵穴埋土、C層はピット埋土である。

床面の状態 ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められ、中央部付近は堅くしまる。カマド構築石材と思われる角・円礫が多数検出された。

カマド カマドは南壁東寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は煙出部が一段低い構造を呈する。規模は南壁－煙出し先端0.94m・幅0.34m・深さ0.05～0.36mをはかる。燃焼部は後世の削平により破壊され、カマド基底部のみ残存する。規模は焚口－煙道基部0.48m・基底部幅0.27m・高さ0.13m（カマド残存部）をはかる。

出土遺物（第111図13・14） 13・14は土師器坏で、13の体部下端～底面には手持ちヘラケズリ調整が施される。内面には黒色処理およびヘラミガキが施される。

RA533（新・旧）堅穴住居跡（第25・26図）

位 置 S5区 **平面形** 方形 **主軸方向** S－N

規 模 南－北上端6.11m・下端5.74m、東－西上端6.42m・下端5.98m、深さ0.49m

重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面 **壁の状態** 外傾して立ち上がる

埋 土 A～D層に大別され、A₂・B₃層は微量の白色火山灰を含む。

床面の状態 ほぼ平坦。全面に床構築土（L層）が認められ、中央部付近は堅くしまる。

カマド カマドは新旧2時期あり、新期カマドは南壁東寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は燃焼部に向かって緩やかに傾斜する。規模は南壁－煙出し先端までの長さ0.95m・幅0.18～0.48m・深さ0.05～0.30mをはかる。燃焼部はカマド基底部のみが残存し、規模は焚口－煙道基部1.08m・基底部幅0.44m・高さ0.08m（カマド残存部）をはかる。旧期カマドは東壁南寄りに位置し、煙道・煙出部・火床面が残存する。煙道平面形は溝状で、底面は煙出部が一段低い構造を呈する。規模は東壁－煙出し先端までの長さ1.22m・幅0.33～0.58m・深さ0.17～0.34mをはかる。

柱 穴 新期P1～11、旧期P1～4が床面より検出されている。主柱穴はともに4口（新期P4・7・10・11、旧期P1～4）が相当する。主柱穴の床面からの深さは次のとおり。新期P4－0.48m・P7－0.43m・P10－0.47m・P11－0.50m、旧期P1－0.37m・P2－0.46m・P3－0.50m・P4－0.43m

出土遺物（第112図1～10） 1・2・4・5・7はロクロ成形のあかやき土器坏で、底部切り離しは回転糸切無調整である。3・8は土師器坏で、内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。6はロクロ成形のあかやき土器高台付坏である。9は土師器小形甕で、口縁部には内外ともにヨコナデが施される。体部には輪積みによる凹凸が認められ、外面にはヘラケズリ調整、内面にはヘラナデが施される。底面には多量の砂が付着する。10は用途不明の棒状鉄製品で、両端を欠く。

RA534堅穴住居跡（第27図）

位 置 R4区 **平面形** 方形 **主軸方向** S－N

規 模 南－北上端5.36m・下端5.11m、東－西上端5.38m・下端5.14m、深さ0.24m

重複関係 R D230・231を切る **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面

埋土 A～E層に大別され、A層は微量の白色火山灰を含む。

壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土（L層）南半部は堅くしまる。

カマド カマドは南壁東寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は後世の削平により部分的に破壊されているが、燃焼部や煙出部より一段高い構造を呈する。規模は南壁－煙出し先端2.06m・幅0.57m・深さ0.18mをはかる。燃焼部は角・円礫などの石材で構築し、褐色シルト・粘質土の混合土（K層）で石組部を補強する。芯材としてあかやき土器坏（第112図11）が据えられている。規模は焚口－煙道基部0.82m・基底部幅0.50m・高さ0.34m（カマド残存部）。

出土遺物（第112図11～15） 11・14はロクロ成形のあかやき土器坏で、底部切り離しは回転糸切無調整である。12・13・15は土師器坏で、内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。

R A 5 3 5 竪穴住居跡（第27図）

位置 R 4区 **平面形** 方形 **主軸方向** S12° W

規模 南－北上端3.75m・下端3.70m、東－西上端2.80m以上・下端2.68m以上、深さ0.24m

重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面

埋土 A・B層に大別され、ともに竪穴埋土である。A層には多量の白色火山灰が混入する。

壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められ、堅くしまる。

カマド カマドは南壁東寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は後世の削平により部分的に破壊されているが、燃焼部や煙出部より一段高い構造を呈する。規模は南壁－煙出し先端1.88m・幅0.47m・深さ0.18mをはかる。燃焼部は角・円礫などの石材で構築し、褐色シルト・粘質土の混合土（K層）で石組部を補強する。芯材として土師器坏（第112図17）が据えられている。規模は焚口－煙道基部0.87m・基底部幅0.52m・高さ0.31m（カマド残存部）。

出土遺物（第112図16～18） 16はロクロ成形のあかやき土器坏である。17は口縁部欠損の土師器坏で、内面の黒色処理はとんでいる。18は土師器小形甕で、口縁部外面には指頭による整形痕、内面にはヨコナデが認められる。体部外面にはヘラケズリ調整、内面にはヘラナデが施される。

R A 5 3 6 竪穴住居跡（第28図）

位置 R 3区 **平面形** 方形 **主軸方向** W－E

規模 西－東上端3.04m・下端2.70m、南－北上端2.62m・下端2.25m、深さ0.42m

重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面 **壁の状態** 外傾して立ち上がる

埋土 A・B層に大別され、A層は竪穴埋土、B層はピット埋土である。

床面の状態 ほぼ平坦。南西部に多量の炭化物が認められる。

出土遺物 図示していないが、あかやき土器坏・甕、土師器坏・甕の小片が出土している。

R A 5 3 7 竪穴住居跡（第28図）

位置 S 4区 **平面形** 方形？ **主軸方向** E－W **規模** 不明

重複関係 不明 **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面 **埋土** 不明

壁の状態 不明 床面の状態 ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められ、堅くしまる。
カマド カマドは後世の削平により破壊され、煙出部と燃焼部の火床面のみ残存する。
出土遺物 図示していないが、あかやき土器坏、土師器坏・甕の小片が出土している。

R A 5 3 8 竪穴住居跡（第28図）

位置 S 4区 平面形 方形 主軸方向 E15° N 規模 不明
重複関係 不明 掘込面 削平 検出面 II a層上面 埋土 不明
壁の状態 不明 床面の状態 ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められ、南東部付近は堅くしまる。

カマド カマドは後世の削平により破壊され、煙出部と燃焼部の火床面のみ残存する。

出土遺物（第113図1～3） 1はロクロ成形のあかやき土器坏である。2・3は土師器坏で、2の体部外面には「主」？の墨書文字が認められる。内面には黒色処理およびヘラミガキが施される。

R A 5 3 9 竪穴住居跡（第29図）

位置 S 4区 平面形 方形？ 主軸方向 E-W 規模 不明
重複関係 不明 掘込面 削平 検出面 II a層上面 埋土 不明
壁の状態 不明 床面の状態 ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められる。

カマド カマドは後世の削平により破壊され、煙出部と燃焼部の火床面のみ残存する。

出土遺物（第113図4） 4は口縁部が外反する土師器高台付坏で、台部を欠く。内面には黒色処理およびヘラミガキが施される。

R A 5 4 0 竪穴住居跡（第29図）

位置 S 4区 平面形 方形 主軸方向 E17° N
規模 北東-南西上端3.74m・下端3.46m、北西-南東上端4.66m・下端4.24m、深さ0.38m
重複関係 R D1042を切る 掘込面 削平 検出面 II a層上面
埋土 A～D層に大別され、A層は微量の白色火山灰を含む。 壁の状態 外傾して立ち上がる

床面の状態 平坦。中央部付近に炭化材が認められる。焼失住居か。

カマド カマドは北東壁南寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は煙出部が一段低い構造を呈し、天井・側面は褐色シルト・粘質土の混合土（K層）を補強材として、角・円礫による石組みで構築される。規模は北東壁-煙出し先端1.88m・幅0.12～0.79m・深さ0.12～0.84mをはかる。燃焼部は角・円礫などの石材で構築し、芯材として土師器小形甕（・第113図6）が据えられている。規模は焚口-煙道基部0.90m・基底部幅0.43m・高さ0.22mをはかる。

出土遺物（第113図5～8） 5は灯明皿に転用されたあかやき土器坏で、口縁部下にはタール状の付着物が認められる。6は土師器小形甕で、頸部に屈曲をもつ。体部には内外ともにヘラナデが施される。7はあかやき土器小形壺で、体部外面にはヘラケズリ調整が施される。8は土師器坏で、体部外面に「寺」の墨書文字が認められる。内面には黒色処理およびヘラミガキが施される。

R A 5 4 1 竪穴住居跡 (第30図)

位置 S 4区 平面形 方形? 主軸方向 S-N 規模 不明
 重複関係 不明 掘込面 削平 検出面 II a層上面 埋土 不明
 壁の状態 不明 床面の状態 ほぼ平坦。床構築土 (L層) が認められる。
 カマド カマドは後世の削平により破壊され、煙道と燃焼部の火床面のみ残存する。
 出土遺物 図示していないが、あかやき土器坏の小片が出土している。

R A 5 4 2 (旧) 竪穴住居跡 (第31図)

位置 S 4区 平面形 方形 主軸方向 S12° E
 規模 南-北上端4.22m・下端3.95m、東-西上端3.75m・下端3.46m、深さ0.32m
 重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 II a層上面
 埋土 A~D層に大別され、A層は竪穴埋土、B層は貯蔵穴埋土、C・D層はピット埋土である。
 壁の状態 外傾して立ち上がる 床面の状態 ほぼ平坦。部分的に床構築土 (L層) が認められる。
 カマド カマドは後世の削平により破壊され、煙道と燃焼部の火床面のみ残存する。南東壁東端に位置し、煙道平面形は溝状で、底面は煙出部が一段低い構造を呈する。規模は南東壁-煙出し先端1.22m・幅0.33~0.62m・深さ0.37mをはかる。
 施設等 床面中央部より貯蔵穴が検出され、規模は長軸1.36m・短軸1.22m・床面からの深さ0.23mをはかる。埋土内には鍛造剥片が検出されており、小鍛冶遺構か。
 出土遺物 図示していないが、あかやき土器坏、フイゴの羽口が出土している。

R A 5 4 2 (新) 竪穴建物跡 (第31図)

時期 中世 位置 S 4区 平面形 張り出し部をもつ方形 主軸方向 S13° W
 規模 南西-北東上端4.84m・下端4.48m、南東-北西上端3.73m・下端3.54m、張り出し部長軸上端0.98m・下端0.88m、短軸上端0.83m・下端0.64m、深さ0.37m
 重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 II a層上面
 埋土 A~D層に大別される。A・B層は竪穴埋土、C・D層はピット埋土である。
 壁の状態 外傾して立ち上がる 床面の状態 ほぼ平坦 出土遺物 なし
 柱穴 P 1~9が床面より検出されている。建物を構成する柱穴は6口 (P 1~5・9) が相当し、柱痕跡が認められる。主柱穴の床面からの深さは次のとおりである。P 1-0.46m・P 2-0.53m・P 3-0.57m・P 4-0.44m・P 5-0.45m・P 9-0.41m

R E 5 4 3 竪穴跡 (第30図)

位置 S 4区 平面形 方形 主軸方向 N12° E 規模 不明
 重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 II a層上面
 埋土 A・B層に大別され、A層は貯蔵穴埋土、B層はピット埋土である。
 壁の状態 不明 床面の状態 ほぼ平坦。床構築土 (L層) が認められる。
 出土遺物 図示していないが、あかやき土器坏、土師器甕の小片が出土している。

RA544 竪穴住居跡 (第30図)

位置 S4区 **平面形** 方形 **主軸方向** S11° E
規模 南東-北西上端2.58m・下端2.42m、北東-南西上端2.64m・下端2.46m、深さ0.21m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面 **壁の状態** 外傾して立ち上がる

埋土 A～D層に大別され、A₁・B₁層は微量の白色火山灰を含む。

床面の状態 ほぼ平坦。全面に床構築土(L層)が認められ、カマド付近は堅くしまる。

カマド カマドは南壁西寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は燃烧部や煙出部より一段高い構造を呈し、側面は角・円礫による石組みで補強される。規模は南壁-煙出し先端0.97m・幅0.22～0.30m・深さ0.08～0.34mをはかる。燃烧部は礫を芯材として構築し、規模は焚口-煙道基部0.27m・基底部幅0.36m・高さ0.33m(カマド残存部)をはかる。

出土遺物(第113図9) 9は土師器小形甕で、口縁部は短く外反する。体部外面にはヘラケズリ調整、内面にはヘラナデが施される。

RA545 竪穴住居跡 (第32図)

位置 S4区 **平面形** 方形 **主軸方向** S13° W
規模 南西-北東上端4.26m・下端3.97m、南東-北西上端3.92m・下端3.55m、深さ0.38m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面 **壁の状態** 外傾して立ち上がる

埋土 A～E層に大別され、A～C層は竪穴埋土、D層は貯蔵穴埋土、E層はピット埋土である。

床面の状態 平坦。床構築土(L層)が認められる。中央部付近は堅くしまり、炭化材が認められる。

カマド カマドは南西壁西寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は燃烧部や煙出部より一段高い構造を呈し、天井・側面は角・円礫による石組みで構築される。規模は南西壁-煙出し先端2.03m・幅0.28～0.66m・深さ0.03～0.38mをはかる。燃烧部は角・円礫などの石材で構築し、芯材としてあかやき土器坏・土師器小形甕・石材を重ねて据えている。規模は焚口-煙道基部0.92m・基底部幅0.49m・天井部幅(石組み)0.51m・高さ0.51mをはかる。

遺物の出土状況 B₁層より土師質土器坏(第114図8～13)が多量に出土した。図示していないが破片量はコンテナ箱(35cm×55cm)2箱分の出土で、一括して廃棄した土器と考えられる。L・J層など住居に伴う坏(第114図1～6)に比べ、全体的に器壁に厚みのある土器である。

出土遺物(第114図1～14) 1～5はロクロ成形のあかやき土器坏、6は土師器坏で、内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。7はあかやき土器長胴甕で、体部外面にヘラケズリ調整、内面にヘラナデが施される。体部外面には多量の煤が付着する。14はあかやき土器小形壺で、体部に「上万」の刻書文字が認められる。8～13は土師質土器坏である。

RA546 竪穴住居跡 (第32図)

位置 S3区 **平面形** 方形 **主軸方向** E-W
規模 東-西上端3.95m・下端3.50m、北-南上端4.58m・下端4.13m、深さ0.52m
重複関係 RD552に切られ、RD107を切る **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋土 A～F層に大別され、A層は微量の白色火山灰を含む。

壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。全面に床構築土（L層）が認められる。

カマド カマドは東壁北寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は燃焼部へ向かって緩やかに傾斜する。天井・側面は褐色シルト・粘質土の混合土（K層）を補強材として、角・円礫による石組みで構築される。規模は東壁－煙出し先端0.93m・石組み内の幅0.18m・深さ0.28mをはかる。燃焼部は礫を芯材として構築し、規模は焚口－煙道基部0.63m・高さ0.30m（カマド残存部）。

柱 穴 P 1～4が床面より検出されており、ともに支柱穴に相当する。床面からの深さは次のとおりである。P 1－0.60m・P 2－0.53m・P 3－0.30m・P 4－0.50m

出土遺物（第115図1～5） 1は土師質土器小皿で、内外面に墨書文字が認められるが判読不明である。2は土師器坏で、内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。3・4は土師質土器小皿である。5は底部欠損の土師器長胴甕で、口縁部には内外ともにヨコナデが施される。体部には外面にヘラケズリ調整、内面にヘラナデが施される。

R A 5 4 7 竪穴住居跡（第33図）

位 置 S 4 区 **平 面 形** 方形 **主軸方向** S 7° W

規 模 南－北上端5.96m・下端5.52m、東－西上端5.03m・下端4.98m、深さ0.19m

重複関係 なし **掘 込 面** 削平 **検 出 面** II a層上面

埋 土 A～F層に大別され、A層は微量の白色火山灰を含む。

壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められる。

カマド カマドは南壁東寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は後世の削平により部分的に破壊されているが、煙出部が一段低い構造を呈する。規模は南壁－煙出し先端1.35m・幅0.28m・深さ0.40mをはかる。燃焼部は礫を芯材として構築し、規模は焚口－煙道基部0.69m・基底幅0.48m・高さ0.30m（カマド残存部）をはかる。

柱 穴 P 1～8が床面より検出されており、支柱穴は4口（P 3～5・8）が相当する。支柱穴の床面からの深さは次のとおりである。P 3－0.38m・P 4－0.43m・P 5－0.37m・P 8－0.40m

出土遺物（第115図6～10） 6～10は須恵器坏で、6・7の体部外面には「人」の墨書文字が認められる。6の底面には回転ヘラケズリ調整が施される。8・10の内外面には火襷痕が認められる。

R A 5 4 8 竪穴住居跡（第33図）

位 置 S 4 区 **平 面 形** 方形 **主軸方向** E 8° N

規 模 北東－南西上端4.17m・下端3.94m、北西－南東上端4.46m・下端4.12m、深さ0.22m

重複関係 R A 5 5 3 に切られる **掘 込 面** 削平 **検 出 面** II a層上面

埋 土 A～C層に大別され、A層は微量の白色火山灰を含む。

壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められ、堅くしまる。

カマド カマドは北東壁南寄りに位置する。煙道は後世の削平により煙出部が破壊されているが、平面形は溝状を呈し、底面はほぼ平坦である。側面は角・円礫による石組みで補強される。規模は幅0.21m・深さ0.27mをはかる。燃焼部は礫を芯材として構築し、規模は焚口－煙道基部

0.55m・高さ0.31m（カマド残存部）をはかる。

柱 穴 P 1～5が床面より検出されており、主柱穴は4口（P 1・2・4・5）が相当する。主柱穴の床面からの深さは次のとおりである。P 1-0.39m・P 2-0.46m・P 4-0.34m・P 5-0.36m

出土遺物（第115図11～14） 11・13・14は土師器坏で、11・14の内外面には煤が付着する。14の体部下端にはヘラケズリ調整が施される。12はあかやき土器坏である。

R A 5 4 9 竪穴住居跡（第34図）

位 置 S 4 区 **平 面 形** 方形？ **主軸方向** S-N **規 模** 不明

重複関係 不明 **掘 込 面** 削平 **検 出 面** II a層上面

埋 土 A～C層に大別され、A層は竪穴埋土、B・C層はピット埋土である。

壁の状態 不明 **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められる。

カ マ ド カマドは南壁東寄りに位置し、後世の削平により煙道と燃焼部の火床面のみ残存する。煙道平面形は溝状で、底面は煙出部に向かって緩やかに傾斜する。

柱 穴 P 1～5が床面より検出されており、主柱穴は4口（P 1～4）が相当する。主柱穴の床面からの深さは次のとおりである。P 1-0.40m・P 2-0.43m・P 3-0.43m・P 4-0.40m

出土遺物（第115図15・16） 15はロクロ成形のあかやき土器坏である。16は土師器坏で、底部切り離しは回転糸切後に回転ヘラケズリ調整が施される。

R A 5 5 0 竪穴住居跡（第34図）

位 置 S 4 区 **平 面 形** 方形？ **主軸方向** E-W **規 模** 不明

重複関係 不明 **掘 込 面** 削平 **検 出 面** II a層上面 **埋 土** A層はピット埋土である。

壁の状態 不明 **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められる。

カ マ ド カマドは東壁南寄りに位置し、後世の削平により煙出部と燃焼部の火床面のみ残存する。

出土遺物（第115図17） 17は土師器坏で、底部切り離しは回転ヘラ切り無調整である。

R A 5 5 1（新・旧）竪穴住居跡（第35・36図）

位 置 S 4 区 **平 面 形** 方形 **主軸方向** S 10° E

規 模 北東-南西上端5.60m・下端5.34m、南東-北西上端5.46m・下端5.24m、高さ0.21m

重複関係 R B 501に切られ、R E 013を切る **掘 込 面** 削平 **検 出 面** II a層上面

埋 土 A～E層に大別される。 **壁の状態** 外傾して立ち上がる

床面の状態 ほぼ平坦。炭化した建築部材（組材・壁板材）など多量の炭化材が認められる。焼失住居か。

カ マ ド カマドは新旧2時期あり、新时期カマドは南壁東寄りに位置し、後世の削平により燃焼部のみ残存する。規模は焚口-煙道基部0.86m・基底部幅0.52m・高さ0.25m（カマド残存部）をはかる。旧期カマドは東壁南寄りに位置し、煙道・煙出部・火床面が残存する。煙道はくりぬき状を呈し、底面は煙出部に向かって緩やかに傾斜する。規模は東壁-煙出し先端までの長さ1.26m・幅0.44m・高さ0.22～0.56mをはかる。

柱 穴 新期P 1～10、旧期P 1・2が床面より検出され、主柱穴は4口（新期P 1～4）が相当する。主柱穴の床面からの深さは次のとおり。P 1 -0.38m・P 2 -0.63m・P 3 -0.61m・P 4 -0.38m

遺物の出土状況 床面より炭化した豆・穀物類、堅果類のほか、鉄鏃（・第121図51）・鉄滓・砥石なども合わせて検出された。小鍛冶遺構か。

出土遺物（第116図1～第121図53） 1～3・5・7・16・21・28～33・44はあかやき土器坏、8・9・17・34～はあかやき土器高台付坏である。4・6・10～15・18～20・22・37～41は土師器坏で、4・6・38の黒色処理はとんでいる。13の底面には判読不明の墨書文字とヘラ記号「×」が認められる。37・38の外表面には墨書文字が認められ、37は「有」。23はあかやき土器鉢で、外面の体部下半にはヘラケズリ調整が施される。24は須恵器大甕で、体部には内外ともに平行文のタタキが施される。頸部および体部上半にはヘラ記号が認められる。25～27はあかやき土器長胴甕である。25の体部外面には平行タタキ、体部下半には内外ともにヘラケズリ調整が施される。27の体部外面にはヘラケズリ調整が施され、多量の煤が付着する。42は須恵器鉢で、全面に自然釉が認められる。43は土師器短頸壺で、内外に黒色処理およびヘラミガキが施される。45・46は土師器長胴甕で、口縁部には内外ともにヨコナデが施される。体部外面にはヘラケズリ調整、内面にはヘラナデが施される。47～49は須恵器短頸壺、50は須恵器長頸瓶である。体部外面にはヘラケズリ調整、内面には47がヘラケズリ調整、48～50にはカキメが施される。47の肩部には平行タタキ後にロクロナデが施される。49の肩部にはヘラ記号が認められる。51は逆刺をもつ鉄鏃である。52・53は用途不明の環状鉄製品で、刀装具か。

R E 5 5 2 竪穴跡（第35図）

位置 S 4 区 **平面形** 方形 **主軸方向** N13° E
規模 北東－南西上端2.10m・下端1.86m、南東－北西上端2.12m・下端1.88m、深さ0.25m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面 **埋土** A・B層に大別される。
壁の状態 不明 **床面の状態** ほぼ平坦。全面に床構築土（L層）が認められる。
出土遺物 図示していないが、あかやき土器坏、土師器甕の小片が出土している。

R A 5 5 3 竪穴住居跡（第37図）

位置 S 4 区 **平面形** 方形 **主軸方向** E5° N
規模 東－西上端6.40m・下端6.14m、北－南上端7.12m・下端6.84m、深さ0.35m
重複関係 R A 548を切る **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋土 A～H層に大別され、A～E層は竪穴・貯蔵穴埋土、F～H層はピット埋土である。
壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められ、堅くしまる。
カマド カマドは東壁南寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、床面は燃焼部より一段低い構造を呈する。規模は南壁－煙出し先端1.92m・幅0.44～0.68m・深さ0.25～0.41mをはかる。燃焼部は角・円礫などの石材で構築し、芯材としてあかやき土器坏（第122図21・22）を据えている。規模は焚口－煙道基部1.71m・基底部幅0.54m・高さ0.42m（カマド残存部）をはかる。

柱 穴 P 1～14が床面より検出されており、主柱穴は4口（P 1～4）が相当する。主柱穴の床面からの深さは次のとおりである。P 1－0.75m・P 2－0.78m・P 3－0.60m・P 4－0.50m

施設等 カマド両側に貯蔵穴1・2が検出され、多量の坏が出土している。規模は次のとおりである。

貯蔵穴1－長軸1.02m・短軸0.88m・床面からの深さ0.35m

貯蔵穴2－長軸1.76m・短軸1.40m・床面からの深さ0.53m

遺物の出土状況 住居の上部は削平のため詳細が不明であるが、検出時に確認されたB₃層より上位の層より土師質土器が一括して出土した（第123図34～45）。しかし、層の大部分が削平され、攪乱された箇所（A₁層）もあることから遺物が多少上下しているものと思われる。

出土遺物（第122図1～第124図59） 1・5～11・20～26・31・32はロクロ成形のあかやき土器坏である。2・3・27はあかやき土器高台付坏で、2・3の底面には菊花状の整形痕が認められる。4・12～18・28・33・46～48は土師器坏で、12は内外ともに黒色処理およびヘラミガキが施される。48の底面には「一」刻書文字が認められる。19はあかやき土器長胴甕で、体部外面にはヘラケズリ調整が施される。26はあかやき土器皿の小片である。29はあかやき土器短頸壺で、口縁部～体部上半の外面にはヘラミガキが施される。59は体部下半～底部欠損の土師器長胴甕で、口縁部外面にはヨコナデが施される。体部外面にはヘラケズリ調整、内面にはヘラナデが施される。

34～45・49～58は土師質土器で、34～45・49～55は坏、39の台部は柱状高台を呈する。53の体部外面には墨書文字が認められるが判読不明である。56～58は皿である。

R A 5 5 4 竪穴住居跡（第38図）

位置	S 3 区	平面形	不明	主軸方向	不明	規模	不明
重複関係	不明	掘込面	削平	検出面	Ⅱ a 層上面	埋土	不明
壁の状態	不明	床面の状態	ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められる。			出土遺物	なし

R A 5 5 5 竪穴住居跡（第38図）

位置	S 4・T 4 区	平面形	方形	主軸方向	S 5° E
規模	南－北上端3.46m・下端3.07m、東－西上端3.54m以上・下端4.42m以上、深さ0.31m				
重複関係	R B 501に切られる	掘込面	削平	検出面	Ⅱ a 層上面
埋土	A～D層に大別され、A ₁ ・A ₂ 層は微量の白色火山灰を含む。				
壁の状態	外傾して立ち上がる	床面の状態	平坦。中央部付近に多量の炭化材が認められる。		
カマド	カマドは南壁東寄りに位置し、後世の削平により部分的に破壊される。規模は南壁－煙出し先端1.40m・幅0.58m・深さ0.20mをはかる。燃焼部は角・円礫などの石材で構築し、芯材としてあかやき土器小形甕を据えている。規模は焚口－煙道基部0.90m・基底部幅0.55m・高さ0.32m（カマド残存部）をはかる。				

出土遺物（第124図60・61） 60はロクロ成形のあかやき土器坏である。61は土師器坏で、体部下半～底面に数条のヘラ書きが施される。

RA556 竪穴住居跡 (第39図)

位置 S4区 **平面形** 方形 **主軸方向** E17° N
規模 北東-南西上端 3.48m・下端3.20m、北西-南東上端3.42m・下端3.02m、深さ0.22m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋土 A~C層に大別され、ともに竪穴埋土である。 **壁の状態** 外傾して立ち上がる
床面の状態 ほぼ平坦。床構築土(L層)が認められ、南東部付近は堅くしまる。
カマド カマドは北東壁南寄りに位置し、後世の削平により破壊され、燃焼部のみ残存する。礫を芯材として構築し、規模は焚口-煙道基部0.52m・基底部幅0.40m・高さ0.22m(カマド残存部)。
出土遺物(第124図62~69) 62~66はロクロ成形のあかやき土器坏、68はあかやき土器高台付坏である。65・69は土師器坏である。

RA557 竪穴住居跡 (第39図)

位置 T4区 **平面形** 方形 **主軸方向** N31° E
規模 北東-南西上端4.84m・下端4.37m、南東-北西上端5.25m・下端4.86m、深さ0.29m
重複関係 RA558を切る **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋土 A~D層に大別され、A・B層は竪穴埋土、C・D層は貯蔵穴・ピット埋土である。
壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** 平坦。床構築土(L層)が認められ、堅くしまる。
カマド カマドは北東壁南寄りに位置する。底面は煙出部に向かって緩やかに傾斜する。規模は北東壁-煙出し先端までの長さ1.44m・幅0.36m・深さ0.18~0.68mをはかる。燃焼部は礫を芯材として構築し、規模は焚口-煙道基部0.38m・基底部幅0.48m・高さ0.36mをはかる。
柱穴 P1~8が床面より検出され、主柱穴は4口(P1~4)が相当する。主柱穴の床面からの深さは次のとおり。P1-0.55m・P2-0.70m・P3-0.58m・P4-0.56m
出土遺物(第125図1~第127図31) 1はロクロ成形のあかやき土器皿、2はあかやき土器高台付皿である。3・5~8・16・23~26は土師器坏、4・28・29は土師器高台付坏である。5は内外ともに黒色処理およびヘラミガキが施される。24の底面には手持ちヘラケズリ調整が施される。9・11・21はあかやき土器坏、15はあかやき土器高台付坏、30はあかやき土器高台付坏である。9の体部外面には2カ所の墨書文字が認められるが判読不明である。20・22・27・30は土師質土器で20・22は坏、27は小形坏、30は高台付坏で柱状高台を呈する。10は土師器壺で、体部は球胴形を呈する。外面にヘラケズリ調整、内面にヘラナデが施される。12~14・17~19・31は土師器甕で、口縁部は短く外反する。17の口縁部下には指頭による整形痕、12・19の体部外面には輪積みによる巻上げ痕が認められる。主に口縁部には内外ともにヨコナデ、体部外面および内面下端にはヘラケズリ調整、内面にはヘラナデが施される。

RA558 (新・旧) 竪穴住居跡 (第40・41図)

位置 T4区 **平面形** 方形 **主軸方向** S-N
規模 南-北上端5.80m・下端5.30m、東-西上端5.72m・下端5.28m、深さ0.38m
重複関係 RB501・RA557に切られ、RD575・576を切る **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面

埋 土 A～F層に大別され、A・B₁層は微量の白色火山灰を含む。
壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められ、堅くしまる。

カマド カマドは新旧2時期あり、新期カマドは南壁東寄りに位置し、後世の削平により煙出部を欠く。煙道平面形は溝状で、底面は燃焼部より一段高い構造を呈する。燃焼部は角・円礫などの石材で構築し、芯材としてあかやき土器高台付坏（第129図28）を据えている。規模は焚口ー煙道基部0.85m・基底部幅0.42m・高さ0.39m（カマド残存部）。旧期カマドは東壁南寄りに位置し、煙道・煙出部・火床面が残存する。煙道平面形は溝状を呈し、底面は煙出部に向かって緩やかに傾斜する。規模は東壁ー煙出し先端までの長さ0.95m・幅0.70m・深さ0.13～0.29m。

出土遺物（第128図1～第129図46） 1～15・20～23・25～27・29・31～36・39～42はロクロ成形のあかやき土器坏、16・17・24・28・44はあかやき土器高台付坏である。18・19・30・37・38は土師器坏、45は土師器高台付坏で、内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。19の体部下半には貫通孔が認められる。43は土師器小形甕で、口縁部外面にはヨコナデ、体部にはヘラミガキが施される。内面下端にはヘラナデが施される。46は刀子で、茎に木質部が残存する。

RE559 竪穴跡（第40図）

位 置 T4区 **平面形** 方形 **主軸方向** N26° E
規 模 北東ー南西上端1.91m・下端1.68m、南東ー北西上端1.58m・下端1.24m、深さ0.13m
重複関係 RB501に切られる **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋 土 A層は多量の白色火山灰を含む。 **壁の状態** 外傾して立ち上がる
床面の状態 ほぼ平坦。床面全体に焼土が認められる。
出土遺物（第129図47） 47はあかやき土器坏で、底部切り離しは回転糸切無調整である。

RE560 竪穴跡（第42図）

位 置 T3区 **平面形** 不明 **主軸方向** N38° E
規 模 長軸上端4.46m・下端4.20m、短軸上端3.22m以上・下端2.86m以上、深さ0.35m
重複関係 不明RD186・河道4に切られる **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋 土 A～D層に大別され、B₂・B₃層は微量の白色火山灰を含む。
壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦
出土遺物 図示していないが、あかやき土器坏・甕、土師器坏・甕の小片が出土している。

RA561 竪穴住居跡（第42図）

位 置 T4区 **平面形** 方形 **主軸方向** E-W
規 模 東ー西上端3.70m・下端3.54m、北ー南上端3.98m・下端3.76m、深さ0.18m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋 土 A～C層に大別され、ともに竪穴埋土である。
壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** 平坦。全面に床構築土（L層）が認められる。
カマド カマドは東壁南寄りに位置する。底面は煙出部に向かって緩やかに傾斜する。規模は東壁ー煙出し先端までの長さ1.32m・幅0.35m・深さ0.13～0.35mをはかる。燃焼部は礫を芯材として

構築し、規模は焚口-煙道基部0.73m・基底部幅0.55m・高さ0.26m（カマド残存部）をはかる。

施設等 カマド右袖に接して貯蔵穴が検出され、ほぼ完形のあかやき土器坏・高台付坏4点（第130図5～7・9）が出土している。規模は長軸0.72m・短軸0.56m・床面からの深さ0.28m。

出土遺物（第130図1～14） 1～7・10～13はロクロ成形のあかやき土器坏、9はあかやき土器高台付坏である。1・2・5の体部外面には「上万」の墨書文字が認められる。8はあかやき土器小形甕で、内面の体部上半にはヘラナデが認められる。28は土師器坏で、口縁部に煤が付着する。

R A 5 6 2 竪穴住居跡（第43図）

位置 T3区 **平面形** 方形 **主軸方向** S10°W
規模 南-北上端4.40m以上・下端4.32m以上、東-西上端4.24m・下端4.09m、深さ0.12m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋土 A～C層に大別され、A層は微量の白色火山灰を含む。
壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められ、堅くしまる。

カマド カマドは南壁東寄りに位置する。煙道は後世の削平により破壊され、燃焼部のみ残存する。規模は焚口-煙道基部0.58m・基底部幅0.35m・高さ0.11m（カマド残存部）をはかる。

出土遺物（第131図1～11） 1・2・4～7・9はロクロ成形のあかやき土器坏、8はあかやき土器高台付坏である。1の体部外面には「寺」の墨書文字が認められる。3・10は土師器坏で、内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。11は土師器小形甕で、外面の口縁部下にはヨコナデ、体部にはヘラケズリ調整が施される。内面には部分的にヘラナデが認められる。

R A 5 6 3 竪穴住居跡（第43図）

位置 T3区 **平面形** 方形 **主軸方向** E-W
規模 東-西上端2.29m・下端2.15m、北-南上端2.16m・下端1.97m、深さ0.33m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面 **埋土** A～C層に大別される。
壁の状態 ほぼ直壁 **床面の状態** 平坦。床構築土（L層）が認められ、堅くしまる。

カマド カマドは東壁北端に位置する。煙道平面形は溝状で、底面は後世の削平により煙出部が破壊されるが、燃焼部より一段高い構造を呈する。燃焼部は礫を芯材として構築し、規模は焚口-煙道基部0.46m・基底部幅0.34m・高さ0.42m（カマド残存部）をはかる。

出土遺物（第131図12～14） 12・13はロクロ成形のあかやき土器坏、14はあかやき土器高台付坏である。14の台部は柱状高台を呈する。

R A 5 6 4 竪穴住居跡（第43図）

位置 T3区 **平面形** 方形？ **主軸方向** S-N
規模 南-北上端3.92m以上・下端3.82m以上、東-西上端3.98m・下端3.70m、深さ0.15m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面 **埋土** A～C層に大別さ

れる。

壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められる。

カマド カマドは後世の削平により破壊され、南壁東寄り付近に燃焼部の火床面のみ残存する。

出土遺物（第131図15・16） 15・16はロクロ成形のあかやき土器坏で、16の体部外面には墨書文字が認められるが判読不明である。

R A 5 6 5 竪穴住居跡（第44図）

位置 T4区 **平面形** 不明 **主軸方向** E-W **規模** 不明

重複関係 不明 **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面 **壁の状態** 不明

埋土 A層は貯蔵穴・ピット埋土である。 **床面の状態** 平坦。床構築土（L層）が認められる。

カマド カマドは後世の削平により破壊され、床面東端部付近に燃焼部の火床面のみ残存する。

出土遺物（第131図17・18） 17はロクロ成形のあかやき土器坏である。18は土師器坏で、内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。

R E 5 6 6 竪穴住居跡（第44図）

位置 T4区 **平面形** 方形 **主軸方向** E-W

規模 東-西上端2.25m・下端2.15m、北-南上端1.77m・下端1.63m、深さ0.05m

重複関係 不明 **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面 **壁の状態** 外傾して立ち上がる

埋土 A～C層に大別され、A層は微量の白色火山灰を含む。

床面の状態 平坦。床構築土（L層）が認められる。焼土 東壁下中央部に焼土が認められる。

出土遺物 図示していないが、あかやき土器坏・甕、土師器坏・甕の小片が出土している。

R A 5 6 7 竪穴住居跡（第44図）

位置 T4区 **平面形** 方形 **主軸方向** E9° S

規模 東-西上端3.08m・下端2.98m、北-南上端3.31m・下端3.18m、深さ0.07m

重複関係 不明 **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面 **埋土** A～C層に大別される。

壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** 平坦。床構築土（L層）が認められる。

カマド カマドは後世の削平により破壊され、煙出部と燃焼部の火床面のみ残存する。

出土遺物（第131図19） 19はあかやき土器坏で、口縁部が外反する。

R A 5 6 8 竪穴住居跡（第45図）

位置 T4区 **平面形** 方形 **主軸方向** E40° S

規模 南東-北西上端3.52m・下端3.42m、北東-南西上端4.18m・下端3.92m、深さ0.19m

重複関係 R D195を切る **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面

埋土 A～C層に大別され、A層は白色火山灰を含む。 **壁の状態** 外傾して立ち上がる

床面の状態 ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められ、中央部付近は堅くしまる。

カマド カマドは後世の削平により破壊され、燃焼部の火床面のみ残存する。燃焼部には芯材としてあかやき土器坏・土師器坏・土師器甕（・第132図1～8）を重ねて据えている。

出土遺物（第132図1～17） 1～4・9・10・13・15・16はロクロ成形のあかやき土器坏で、14はあかやき土器高台付坏である。5・6・11・12・17は土師器坏で、5は外面にもヘラミガキが認められる。7は土師器長胴甕で、口縁部には内外ともにヨコナデを施す。体部外面にはヘラケズリ調整、内面にはヘラナデが施される。8は土師器小形甕で、輪積みによる凹凸が認められる。口縁部には内外ともにヨコナデ、体部外面にはヘラミガキを施す。内面にはヘラナデが施される。

R A 5 6 9 竪穴住居跡（第45図）

位置 T3区 **平面形** 方形？ **主軸方向** S-N **規模** 不明
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面 **壁の状態** 外傾して立ち上がる
埋土 J₃層は微量の白色火山灰を含む。 **床面の状態** 平坦。床構築土（L層）が認められる。

カマド カマドは後世の削平により破壊され、煙道と燃焼部の火床面のみ残存する。煙道平面形は溝状で、床面は煙出部に向かって緩やかに傾斜する。規模は南壁－煙出し先端までの長さ1.35m・幅0.52m・深さ0.16～0.79mをはかる。

出土遺物（第133図1・2） 1はロクロ成形のあかやき土器坏である。

R A 5 7 0 竪穴住居跡（第45図）

位置 T3区 **平面形** 方形 **主軸方向** S-N
規模 南－北上端3.21m以上・下端3.18m以上、東－西上端3.53m・下端3.37m、深さ0.11m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋土 A～C層に大別される。 **壁の状態** 外傾して立ち上がる
床面の状態 ほぼ平坦。全面に床構築土（L層）が認められ、中央部付近は堅くしまる。

カマド カマドは後世の削平により破壊され、カマド基底部のみ残存する。規模は焚口－煙道基部0.94m・基底部幅0.54m・高さ0.10m（カマド残存部）をはかる。

出土遺物（第133図3～5） 3・4はロクロ成形のあかやき土器坏で、3の口縁部は意図的に打ち欠かれる。体部外面にはタール状の付着物が認められる。5は口頸部欠損の須恵器壺で、外面の体部下半にはヘラナデが施される。

R A 5 7 1 竪穴住居跡（第46図）

位置 T4区 **平面形** 方形？ **主軸方向** E18° S **規模** 不明
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面 **埋土** A・B層はピット埋土である。

壁の状態 不明 **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められる。

出土遺物 図示していないが、あかやき土器坏、土師器坏・甕の小片が出土している。

RA572 竪穴住居跡 (第46図)

位置 T3区 **平面形** 方形 **主軸方向** S14° W
規模 南西-北東上端3.88m・下端3.48m、南東-北西上端3.81m・下端3.53m、深さ0.25m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面 **埋土** A～D層に大別される。

壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土 (L層) が認められ、堅くしまる。

カマド カマドは後世の削平により破壊され、床面南東部に燃焼部の火床面のみ残存する。

出土遺物 (第133図6～10) 6～8はロクロ成形のあかやき土器坏、10はあかやき土器高台付坏である。7の体部下端外面には墨書文字が認められるが判読不明である。10の台部は柱状高台を呈する。9は土師器坏で、内外に黒色処理およびヘラミガキが施される。

RA573 竪穴住居跡 (第46図)

位置 U3区 **平面形** 方形 **主軸方向** E16° S
規模 南東-北西上端3.95m・下端3.72m、北東-南西上端3.05m・下端2.82m、深さ0.13m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面 **埋土** A～C層に大別される。

壁の状態 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土 (L層) が認められる。

カマド カマドは南東壁北寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は煙出部に向かって緩やかに傾斜する。規模は南東壁-煙出し先端までの長さ1.10m・幅0.54m・深さ0.11～0.24mをはかる。燃焼部は後世の削平により破壊され、火床面のみ残存する。

出土遺物 (第133図11) 11はロクロ成形のあかやき土器坏である。

RA574 竪穴住居跡 (第47図)

位置 U3区 **平面形** 不明 **主軸方向** 不明 **規模** 不明
重複関係 不明 **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面 **埋土** A層はピット埋土である。

壁の状態 不明 **床面の状態** 床構築土 (L層) が認められる。

出土遺物 (第133図12) 12は土師器坏で、内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。

RA575 竪穴住居跡 (第47図)

位置 U3区 **平面形** 方形 **主軸方向** S20° W
規模 南西-北東上端3.54m・下端3.28m、南東-北西上端3.24m・下端2.92m、深さ0.21m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面

埋土 A～C層に大別され、A・B層は白色火山灰を含む。 **壁の状態** 外傾して立ち上がる
南壁中央部には床面に向かって緩やかに傾斜するスロープ状の堅い面が認められ、出入口と考えられる。

床面の状態 ほぼ平坦。北西壁中央部には床構築土 (L層) によるスロープ状の面が認められ、出入口か。

カマド カマドは南西壁東寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は燃焼部・煙出部より一段高い構造を呈する。規模は南西壁―煙出し先端までの長さ0.92m・幅0.18m・高さ0.37mをはかる。燃焼部は礫を芯材として構築し、規模は焚口―煙道基部0.37m・基底部幅0.32m・高さ0.40m（カマド残存部）をはかる。

出土遺物（第133図13～15） 13はロクロ成形のあかやき土器坏である。

R A 5 7 6 竪穴住居跡（第47図）

位置 U 3区 **平面形** 方形 **主軸方向** E 20° S
規模 南東―北西上端4.38m・下端3.94m、北東―南西上端4.00m・下端3.42m、高さ0.22m
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋土 A～C層に大別され、A層は微量の白色火山灰を含む。 **壁の状態** 外傾して立ち上がる
南壁中央部には床面に向かって緩やかに傾斜するスロープ状の堅い面が認められ、出入口と考えられる。

床面の状態 ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められ、中央部付近は堅くしまる。

カマド カマドは後世の削平により破壊され、燃焼部のみ残存する。南東壁北寄りに位置し、燃焼部は礫を芯材として構築される。規模は焚口―煙道基部0.75m・基底部幅0.48m・高さ0.33m（カマド残存部）をはかる。

出土遺物（第133図16・17） 16・17はロクロ成形のあかやき土器坏で、16の体部外面には「千」の墨書文字が認められる。

R E 5 7 7 竪穴住居跡（第48図）

位置 T 3区 **平面形** 不明 **主軸方向** E 31° S **規模** 不明
重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面 **埋土** 不明
床面の状態 ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められる。焼土 床面中央部に焼土が認められる。
出土遺物 図示していないが、あかやき土器坏、土師器甕の小片が出土している。

R A 5 7 8 竪穴住居跡（第48図）

位置 T 3区 **平面形** 方形 **主軸方向** E-W
規模 東―西上端4.35m・下端4.02m、北―南上端3.80m以上・下端3.60m以上、高さ0.25m
重複関係 R D 541・R G 510に切られる **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面
埋土 A～C層に大別される。 **壁の状態** 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦
カマド カマドは東壁北寄りに位置し、後世の削平により煙出部が破壊される。燃焼部は基底部のみ残存し、規模は焚口―煙道基部0.60m・基底部幅0.46m・高さ0.13m（カマド残存部）をはかる。

出土遺物（第133図18） 18は土師器高台付坏で、内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。

R B 5 0 1 掘立柱建物跡（第54図）

位置 S 4・T 4区 **平面形** 桁行5間・梁間2間の東西棟

規 模 東西5間 (12.65m・41尺7寸)、南北2間 (5.80m・19尺1寸)
 重複関係 RA013・551・555・558、RE559を切る 棟方向 W-E
 柱間寸法 桁行2.38~2.71m (平均2.54m・8尺4寸)、梁間2.82~2.99m (平均2.90m・9尺6寸)
 柱 穴 P1・6・8・9以外の柱穴に柱痕跡が確認され、柱痕跡径0.17~0.34m、掘方径0.94~1.40m、深さ0.78~1.29mをはかる。P5・7・8・11以外の埋土には微量の白色火山灰が混入する。
 出土遺物 (第134図1~3) 1・2はロクロ成形のあかやき土器片である。3は土師器片で、底面に線刻が認められる。

(5) 中世以降の竪穴建物跡・掘立柱建物跡 (第49~53・55~64図)

RE1001 竪穴建物跡 (第49図)

位 置 Q3区 平面形 方形 主軸方向 S12°E
 規 模 北東-南西上端4.38m・下端4.07m、北西-南東上端4.68m・下端4.38m、深さ0.33m
 重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 II a層上面 埋土 A~F層に大別される。
 壁の状態 外傾して立ち上がる 床面の状態 平坦。部分的に床構築土(L層)が認められる。
 柱 穴 P1~8が床面より検出されている。主柱穴は7口(P1~7)が相当し、柱痕跡が認められる。壁面下には小柱穴(周溝)が確認されている。主柱穴の床面からの深さは次のとおり。
 P1-0.42m・P2-0.45m・P3-0.37m・P4-0.37m・P5-0.49m・P6-0.49m・P7-0.44m
 出土遺物 (第134図11・12) 11は小刀で、茎に目釘穴が認められる。12はロクロ成形のかわらけ小片である。また、図示していないが「元豊通寶」「宋通元寶」「元祐通寶」「熙寧元寶」が出土している。

RE1002 竪穴建物跡 (第49図)

位 置 R3区 平面形 方形 主軸方向 N-S
 規 模 北-南上端4.81m・下端4.67m、西-東上端3.67m・下端3.46m、深さ0.08m
 重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 II a層上面 埋土 A~C層に大別される。
 壁の状態 外傾して立ち上がる 床面の状態 平坦。床構築土(L層)が認められる。
 焼 土 中央部南西寄りに焼土が認められる。 出土遺物 なし
 柱 穴 P1~10が床面より検出され、主柱穴は6口(P1~3・5・6・8)が相当する。主柱穴の深さはP1-0.45m・P2-0.46m・P3-0.47m・P5-0.47m・P6-0.38m・P8-0.33m。

RE1003 竪穴跡 (第50図)

位 置 P2・3区 平面形 円形 規 模 長軸3.04m・短軸2.86m以上、深さ0.71m
 重複関係 不明 掘込面 削平 検出面 II a層上面 壁の状態 ほぼ直壁

埋 土 A～C層に大別される。(一部罹災) 床面の状態 平坦 出土遺物 なし

RE1004 竪穴建物跡 (第50図)

位 置 Q4区 平面形 南東端に張出部をもつ方形 主軸方向 S8°W

規 模 南―北上端3.36m・下端3.08m、東―西上端3.20m・下端2.88m、深さ0.62m
張出部長軸0.98m、短軸0.57m、深さ0.12m

重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 II a層上面

埋 土 A～C層に大別され、C₁層は多量の炭化材を含む。 壁の状態 ほぼ直壁

床面の状態 ほぼ平坦。床構築土(L層)が認められる。 焼 土 中央部南寄りに焼土が認められる。

柱 穴 四隅・各辺・中央より建物を構成する柱穴P1～9が確認され、柱痕跡が認められる。床面からの深さは次のとおり。P1-0.26m・P2-0.24m・P3-0.30m・P4-0.22m・P5-0.53m・P6-0.30m・P7-0.53m・P8-0.24m・P9-0.28m

出土遺物 図示していないが、あかやき土器坏、土師器坏の小片が出土している。

RE1005 竪穴建物跡 (第51図)

位 置 R4区 平面形 方形 主軸方向 W35°N

規 模 北西―南東端3.10m以上・下端3.01m、南西―北東上端3.46m・下端3.05m、深さ0.22m

重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 II a層上面 埋 土 A～E層に大別される。

壁の状態 外傾して立ち上がる 床面の状態 平坦。中央部付近に炭化材が認められる。

柱 穴 建物を構成する柱穴P1～6が検出されており、壁面下には小柱穴(周溝)が認められる。深さはP1-0.14m・P2-0.20m・P3-0.31m・P4-0.16m・P5-0.18m・P6-0.14mをはかる。

出土遺物 図示していないが、あかやき土器坏、土師器坏・甕の小片が出土している。

RE1006 竪穴建物跡 (第51図)

位 置 R4区 平面形 南東端に張出部をもつ方形 主軸方向 E35°S

規 模 南東―北西上端3.36m以上・下端2.90m以上、北東―南西上端3.37m・下端3.07m、張出部長軸1.27m、短軸0.92m、深さ0.09～0.47m

重複関係 RD039を切る 掘込面 削平 検出面 II a層上面

埋 土 A～G層に大別される。 壁の状態 外傾して立ち上がる 床面の状態 ほぼ平坦

柱 穴 建物を構成する柱穴P1～4が検出され、柱痕跡が認められる。壁面下には小柱穴(周溝)が確認されている。深さはP1-0.47m・P2-0.57m・P3-0.50m・P4-0.66mをはかる。

出土遺物 図示していないが、須恵器系陶器が出土している。

RE1007 竪穴建物跡 (第52図)

位 置 R4区 平面形 南東端に張出部をもつ方形 主軸方向 S22°W

規 模 南西－北東上端3.44m・下端3.20m、南東－北西上端3.40m・下端3.03m、
張出部長軸1.94m、短軸1.21m、深さ0.26～0.45m

重複関係 RE1008を切る **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面

壁の状態 ほぼ直壁

埋 土 A～D層に大別される。 **床面の状態** ほぼ平坦。床構築土（L層）が認められる。

柱 穴 P1～7が床面より検出されている。主柱穴は6口（P1～6）が相当し、柱痕跡が認められる。壁面下には小柱穴（周溝）が確認されている。主柱穴の床面からの深さはP1－0.50m・P2－0.50m・P3－0.47m・P4－0.53m・P5－0.50m・P6－0.59mをはかる。

出土遺物 図示していないが、古代土器小片のほか、棒状鉄製品・鉄滓が出土している。

RE1008 竪穴建物跡（第52図）

位 置 R4区 **平面形** 方形 **主軸方向** S25° W

規 模 南西－北東上端3.22m・下端2.78m、南東－北西上端3.16m・下端2.83m、深さ0.38m

重複関係 RE1007に切られる **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面

埋 土 A～C層に大別される。 **壁の状態** 外傾して立ち上がる **床面の状態** ほぼ平坦

柱 穴 建物を構成する柱穴P1～6が検出され、柱痕跡が認められる。壁面下には小柱穴（周溝）が確認されている。床面からの深さは次のとおりである。P1－0.56m・P2－0.52m・P3－0.43m・P4－0.52m・P5－0.54m・P6－0.51m

出土遺物 図示していないが、あかやき土器坏・甕、土師器坏・甕の小片が出土している。

RE1009 竪穴建物跡（第53図）

位 置 R4区 **平面形** 南東に張出部をもつ方形 **主軸方向** E17° S

規 模 南東－北西上端4.31m・下端4.15m、北東－南西上端4.20m・下端3.72m、深さ0.45m

重複関係 RG1013に切れ、RD522を切る **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面

埋 土 A～D層に大別される。 **壁の状態** 外傾して立ち上がる **床面の状態** 平坦

柱 穴 P1～11が床面より検出されている。主柱穴は7口（P1・3・5～7・10・11）が相当し、柱痕跡が認められる。壁面下には小柱穴（周溝）が確認されている。主柱穴の床面からの深さはP1－0.67m・P3－0.80m・P5－0.70m・P6－0.55m・P7－0.65m・P10－0.70m・P11－0.37m。

RE1010 竪穴跡（第53図）

位 置 R4区 **平面形** 方形 **主軸方向** N10° E

規 模 北－南上端2.55m・下端2.39m、西－東上端2.60m・下端2.48m、深さ0.18m

重複関係 RD544を切る **掘込面** 削平 **検出面** II a層上面

埋 土 A層は竪穴埋土である。 **壁の状態** 外傾して立ち上がる

床面の状態 ほぼ平坦。部分的に床構築土（L層）が認められる。

出土遺物 図示していないが、土師器坏の小片が出土している。

RB1001 掘立柱建物跡 (第55図)

位置 Q3区 **平面形** 母屋桁行3間・梁間2間の東西棟、四面庇。
規模 母屋東西3間(7.88m・26尺)、南北2間(3.71m・12尺2寸)、
庇東西5間(10.50m・34尺7寸)、南北4間(6.61m・21尺8寸)
重複関係 不明 **棟方向** W11°N
柱間寸法 母屋桁行柱間2.40~3.00m(平均2.63m・8尺7寸)、梁間柱間1.64~2.12m(平均1.85m・6尺1寸)、庇桁行柱間1.36~2.82m(平均2.11m・7尺)、庇梁間柱間1.30~1.96m(平均1.65m・5尺5寸)、母屋-庇柱間1.20~1.52m(平均1.36m・4尺5寸)
柱穴 柱痕跡径0.14~0.35m・掘方径0.19~0.69m・深さ0.20~0.55m

RB1002 掘立柱建物跡 (第56図)

位置 Q3区 **平面形** 母屋桁行6間・梁間2間の東西棟、北庇。
規模 母屋東西6間(9.81m・32尺4寸)、南北2間(4.01m・13尺2寸)、
庇東西6間(9.76m・32尺2寸)
重複関係 不明 **棟方向** W14°N
柱間寸法 母屋桁行柱間北側柱筋1.52~1.84m(平均1.64m・5尺4寸)、南側柱筋3.20~3.45m(平均3.29m・10尺9寸)、梁間柱間1.46~2.46m(平均2.01m・6尺6寸)、庇桁行柱間1.54~1.78m(平均1.63m・5尺4寸)、母屋-庇柱間1.10~1.25m(平均1.33m・4尺4寸)
柱穴 柱痕跡径0.13~0.22m・掘方径0.22~0.63m・深さ0.13~0.69m

RB1003 掘立柱建物跡 (第55図)

位置 Q3区 **平面形** 桁行3間・梁間2間の南北棟 **棟方向** N16°E
規模 東西2間(4.06m・13尺4寸)、南北3間(7.41m・24尺5寸) **重複関係** 不明
柱間寸法 桁行2.30~2.80m(平均2.48m・8尺2寸)、間仕切1.94~2.14m(平均2.04m・6尺7寸)
柱穴 掘方径0.22~0.47m・深さ0.09~0.47m

RB1004 掘立柱建物跡 (第56図)

位置 Q3区 **平面形** 桁行3間・梁間2間の東西棟 **棟方向** W15°N
規模 東西3間(6.06m・20尺)、南北2間(3.77m・12尺4寸) **重複関係** 不明
柱間寸法 桁行1.74~2.35m(平均2.02m・6尺7寸)、梁間1.64~2.10m(平均1.90m・6尺3寸)
柱穴 柱痕跡径0.12~0.29m・掘方径0.31~0.42m・深さ0.15~0.57m

RB1005 掘立柱建物跡 (第57図)

位置 Q3区 **平面形** 桁行2間・梁間2間の南北棟 **棟方向** N9°E
規模 東西2間(4.47m・14尺8寸)、南北2間(4.09m・13尺5寸) **重複関係** 不明
柱間寸法 桁行1.86~2.50m(平均2.25m・7尺4寸)、梁間2.02~2.08m(平均2.05m・6尺7寸)
柱穴 柱痕跡径0.13~0.17m・掘方径0.21~0.41m・深さ0.19~0.24m

R B 1 0 0 6 掘立柱建物跡 (第57図)

位置 Q 3・4区 **平面形** 母屋桁行5間・梁間2間の南北棟、二面庇（東孫庇）。
規模 母屋東西5間（9.44m・31尺1寸）、南北2間（3.57m・11尺8寸）、
庇東西5間（9.42m・31尺1寸）、孫庇東西6間（9.26m・30尺6寸）
重複関係 不明 **棟方向** N20° E
柱間寸法 母屋桁行1.45~2.18m（平均1.90m・6尺3寸）、梁間1.60~1.90m（平均1.78m・5尺9寸）、
庇桁行1.36~2.70m（平均1.89m・6尺2寸）、孫庇桁行1.25~2.12m（平均1.56m・5尺1寸）、
母屋-庇1.26~1.55m（平均1.38m・4尺6寸）、庇-孫庇0.92~1.12m（平均1.05m・3尺5寸）、
間仕切1.72~1.98m（平均1.85m・6尺1寸）
柱穴 柱痕跡径0.07~0.24m・掘方径0.25~0.53m・深さ0.18~0.61m

R B 1 0 0 7 掘立柱建物跡 (第58図)

位置 Q 4区 **平面形** 母屋桁行3間・梁間1間の南北棟、東側南に1間四方の張出。
規模 母屋東西1間（2.73m・9尺）、南北3間（4.43m・14尺6寸）、
張出東西1間（1.24m・4尺1寸）、張出南北1間（1.48m・4尺9寸）
重複関係 なし **棟方向** N-S **柱間寸法** 母屋桁行1.33~1.58m（平均1.49m・4尺9寸）
柱穴 柱痕跡径0.15~0.20m・掘方径0.18~0.33m・深さ0.13~0.45m

R B 1 0 0 8 掘立柱建物跡 (第58図)

位置 Q 4区 **平面形** 桁行4間・梁間2間の南北棟、総柱。 **棟方向** N10° E
規模 東西2間（2.35m・7尺7寸）、南北4間（4.74m・15尺6寸） **重複関係** なし
柱間寸法 桁行0.98~1.51m（平均1.19m・3尺9寸）、梁間1.10~1.22m（平均1.17m・3尺9寸）、間
仕切1.15~1.18m（平均1.16m・3尺8寸）
柱穴 柱痕跡径0.09~0.21m・掘方径0.18~0.36m・深さ0.30~0.60m

R B 1 0 0 9 掘立柱建物跡 (第58図)

位置 Q 4区 **平面形** 桁行4間・梁間2間の東西棟 **棟方向** W7° N
規模 東西4間（5.87m・19尺4寸）、南北2間（4.14m・13尺7寸） **重複関係** なし
柱間寸法 桁行1.18~1.80m（平均1.47m・4尺9寸）、梁間1.94~2.16m（平均2.08m・6尺8寸）、間
仕切2.12~2.20m（平均2.16m・7尺1寸）
柱穴 柱痕跡径0.10~0.18m・掘方径0.23~0.44m・深さ0.30~0.65m

R B 1 0 1 0 掘立柱建物跡 (第59図)

位置 R 4区 **平面形** 母屋桁行3間・梁間2間の南北棟、縁または二面庇（半間）。
規模 母屋東西2間（3.31m・10尺9寸）、南北3間（3.57m・4尺）、庇南北3間（4.12m・13尺
6寸）
重複関係 なし **棟方向** N8° E
柱間寸法 母屋桁行1.19~1.47m（平均1.33m・4尺4寸）、梁間1.46~1.86m（平均1.66m・5尺5寸）、

庇桁行1.22~1.57m (平均1.38m・4尺5寸)、母屋一庇0.40~0.58m (平均0.52m・1尺7寸)
柱 穴 柱痕跡径0.09~0.18m・掘方径0.18~0.30m・深さ0.14~0.54m

R B 1 0 1 1 掘立柱建物跡 (第59図)

位 置 R 4区 平面形 桁行3間・梁間2間の南北棟 棟方向 N10° E
規 模 東西2間 (3.30m・10尺9寸)、南北3間 (5.57m・18尺4寸) 重複関係 なし
柱間寸法 桁行1.53~2.54m (平均1.93m・6尺4寸)、梁間1.58~1.97m (平均1.79m・5尺9寸)
柱 穴 柱痕跡径0.15~0.18m・掘方径0.19~0.50m・深さ0.12~0.52m

R B 1 0 1 2 掘立柱建物跡 (第59図)

位 置 Q 4区 平面形 桁行2間・梁間1間の南北棟
規 模 東西1間 (1.31m・4尺3寸)、南北2間 (2.74m・9尺)
重複関係 なし 棟方向 N11° E 柱間寸法 桁行1.29~1.44m (平均1.37m・4尺5寸)
柱 穴 柱痕跡径0.11~0.22m・掘方径0.21~0.31m・深さ0.09~0.28m

R B 1 0 1 3 掘立柱建物跡 (第60図)

位 置 R 4区 平面形 桁行3間・梁間1間の南北棟 棟方向 N20° E
規 模 東西1間 (3.62m・11尺9寸)、南北3間 (7.22m・23尺8寸)
重複関係 R A517を切る 柱間寸法 桁行1.60~2.63m (平均2.21m・7尺3寸)
柱 穴 柱痕跡径0.11~0.26m・掘方径0.24~0.41m・深さ0.16~0.74m

R B 1 0 1 4 掘立柱建物跡 (第60図)

位 置 R 5区 平面形 桁行2間・梁間2間の南北棟 棟方向 N9° E
規 模 東西2間 (3.12m・10尺3寸)、南北2間 (3.95m・13尺)
重複関係 なし
柱間寸法 桁行1.82~2.17m (平均1.98m・6尺5寸)、梁間1.02~1.89m (平均1.56m・5尺1寸)
柱 穴 柱痕跡径0.12~0.13m・掘方径0.13~0.27m・深さ0.20~0.40m

R B 1 0 1 5 掘立柱建物跡 (第60図)

位 置 S 3区 平面形 桁行3間・梁間2間の東西棟 棟方向 W-E
規 模 東西2間 (5.19m・17尺1寸)、南北2間 (4.65m・15尺3寸) 重複関係 なし
柱間寸法 桁行1.27~2.02m (平均1.73m・5尺7寸)、梁間2.28~2.33m (平均2.31m・7尺6寸)、間
仕切2.34~2.36m (平均2.35m・7尺8寸)
柱 穴 掘方径0.17~0.22m・深さ0.10~0.49m

R B 1 0 1 6 掘立柱建物跡 (第61図)

位 置 S 4区 平面形 母屋桁行7間・梁間2間の東西棟、二面庇。
規 模 母屋東西7間 (11.44m・37尺7寸)、南北2間 (4.00m・13尺2寸)、
庇東西7間 (11.42m・37尺7寸)
重複関係 R A537・538、R F003を切る 棟方向 W-E

柱間寸法 母屋桁行0.89~2.00m (平均1.66m・5尺5寸)、梁間1.88~2.09m (平均2.00m・6尺6寸)、
庇桁行0.86~2.03m (平均1.63m・5尺4寸)、母屋一庇0.80~1.34m (平均1.00m・3尺3寸)
柱 穴 柱痕跡径0.09~0.23m・掘方径0.20~0.48m・深さ0.11~0.47m

R B 1 0 1 7 立柱建物跡 (第62図)

位 置 S 4 区 **平 面 形** 桁行3間・梁間1間の南北棟 **棟 方 向** N 8° E
規 模 東西1間 (4.09m・13尺5寸)、南北3間 (6.50m・21尺5寸)
重複関係 R A 542を切る **柱間寸法** 桁行2.12~2.28m (平均2.19m・7尺2寸)
柱 穴 柱痕跡径0.12m・掘方径0.22~0.31m・深さ0.19~0.39m

R B 1 0 1 8 掘立柱建物跡 (第62図)

位 置 S 4 区 **平 面 形** 桁行3間・梁間2間の南北棟
規 模 東西2間 (4.30m・14尺2寸)、南北3間 (6.17m・20尺4寸)
重複関係 R G 1013に切られ、R A 523を切る **棟 方 向** N 8° W
柱間寸法 桁行2.02~2.10m (平均2.06m・6尺8寸)、梁間2.05~2.26m (平均2.15m・7尺1寸)
柱 穴 柱痕跡径0.10~0.22m・掘方径0.19~0.52m・深さ0.18~0.43m

R B 1 0 1 9 掘立柱建物跡 (第61図)

位 置 S 4 区 **平 面 形** 桁行2間・梁間2間の南北棟 **棟 方 向** N 7° W
規 模 東西2間 (2.79m・9尺2寸)、南北2間 (2.97m・9尺8寸) **重複関係** R A 008を
切る
柱間寸法 桁行1.32~1.48m (平均1.40m・4尺6寸)、梁間1.43~1.52m (平均1.47m・4尺9寸)
柱 穴 掘方径0.24~0.35m・深さ0.16~0.28m

R B 1 0 2 0 掘立柱建物跡 (第63図)

位 置 S 5 区 **平 面 形** 桁行2間・梁間1間の東西棟、東西柱筋に半間柱。
規 模 東西2間 (4.10m・13尺5寸)、南北1間 (2.06m・6尺8寸)
重複関係 なし **棟 方 向** W 10° S **柱間寸法** 桁行1.82~2.26m (平均2.05m・6尺8寸)
柱 穴 柱痕跡径0.12~0.21m・掘方径0.18~0.33m・深さ0.19~0.26m

R B 1 0 2 1 掘立柱建物跡 (第63図)

位 置 S 5 区 **平 面 形** 桁行4間・梁間2間の東西棟 **棟 方 向** W 9° N
規 模 東西4間 (5.99m・19尺8寸)、南北2間 (4.12m・13尺6寸) **重複関係** なし
柱間寸法 桁行1.30~1.81m (平均1.50m・4尺9寸)、梁間2.01~2.14m (平均2.06m・6尺8寸)、間
仕切2.00~2.07m (平均2.04m・6尺7寸)
柱 穴 柱痕跡径0.10~0.21m・掘方径0.19~0.34m・深さ0.29~0.61m

R B 1 0 2 2 掘立柱建物跡 (第63図)

位 置 S 5 区 **平 面 形** 桁行2間・梁間1間の南北棟、東西柱筋に半間柱。

規 模 東西1間 (3.10m・10尺2寸)、南北2間 (4.09m・13尺5寸)
重複関係 なし 棟方向 N18° E 柱間寸法 桁行1.89~2.25m (平均2.05m・6尺7寸)
柱 穴 掘方径0.28~0.35m・深さ0.19~0.36m

RB1023 掘立柱建物跡 (第64図)

位 置 T4区 平面形 母屋桁行5間・梁間2間の東西棟、三面庇。
規 模 母屋東西5間 (8.12m・26尺8寸)、南北2間 (3.20m・10尺6寸)、
庇東西6間 (9.22m・30尺4寸)、南北4間 (5.35m・17尺7寸)
重複関係 RA565を切る 棟方向 W5° N
柱間寸法 母屋桁行柱間1.54~1.74m (平均1.63m・5尺4寸)、梁間柱間1.58~1.61m (平均1.60m・5尺3寸)、庇桁行柱間1.52~1.79m (平均1.63m・5尺4寸)、庇梁間柱間1.07~1.60m (平均1.34m・4尺4寸)、母屋-庇柱間1.03~1.20m (平均1.10m・3尺6寸)
柱 穴 柱痕跡径0.10~0.22m・掘方径0.15~0.46m・深さ0.07~0.27m

RB1024 掘立柱建物跡 (第64図)

位 置 T4区 平面形 母屋桁行3間・梁間1間の東西棟、二面庇 (半間)。
規 模 母屋東西3間 (7.62m・25尺1寸)、南北1間 (3.80m・12尺5寸)、北庇東西3間 (7.22m・23尺8寸)、南庇東西2間 (5.06m・16尺7寸)、西庇南北1間 (1.86m・6尺1寸)
重複関係 RE566・RA567を切る 棟方向 W16° N
柱間寸法 母屋桁行柱間2.50~2.60m (平均2.54m・8尺4寸)、庇桁行柱間2.27~2.54m (平均2.45m・8尺1寸)、母屋-庇柱間0.69~0.94m (平均0.82m・2尺7寸)
柱 穴 柱痕跡径0.18~0.28m・掘方径0.16~0.33m・深さ0.07~0.34m

RB1025 掘立柱建物跡 (第63図)

位 置 T4区 平面形 桁行2間・梁間2間の南北棟 棟方向 N11° E
規 模 東西2間 (3.19m・10尺5寸)、南北2間 (3.86m・12尺7寸) 重複関係 なし
柱間寸法 桁行1.69~2.12m (平均1.93m・6尺4寸)、梁間1.31~1.82m (平均1.60m・5尺3寸)
柱 穴 掘方径0.13~0.28m・深さ0.10~0.42m

(6) 平安時代以降の土坑 (第65~76図、第7・6表)

平安時代以降の土坑は、段丘I北縁を中心にほぼ調査区全域で検出されている。土坑は平面の形状から大きく2形状 (円形・方形) に分類される。本報告書では概要を記し、規模等については表 (第6・7表) にまとめた。

平安時代 平面形が長方形を呈する土坑が段丘崖沿いに複数基で列状に構築されている。今回の調査では、第12・13次調査区より東-西方向に並列する土坑群 (RD537・542~546・549・550・554~560・564・566~570・581・584~588)、南-北方向に並列する土坑群 (RD551~553) が確認された。

出土遺物 (第134図4~7) 4・7は土師器坏で、内面に黒色処理およびヘラミガキが施される。4の

遺構番号	平面形	規 模		深さ (m)	時 期
		上端 (m)	下端 (m)		
R D 501	楕円形	1.64×0.96	1.29×0.61	0.31	
R D 502	不整楕円形	2.12×1.68	1.56×1.01	0.44	
R D 503	方形	1.91×1.61	1.58×1.32	0.26	
R D 504欠番					
R D 505欠番					
R D 506欠番					
R D 507欠番					
R D 508欠番					
R D 509欠番					
R D 510	円形	1.76	1.33	0.38	
R D 511	円形	0.73	0.49	0.67	
R D 512	円形	0.71	0.52	0.48	
R D 513	不整円形	1.04	0.66	0.41	
R D 514	不整楕円形	2.36×1.39	2.19×1.18	0.28	10 C
R D 515	楕円形	1.28×0.71	0.78×0.34	0.29	
R D 516	楕円形	2.07×0.82	1.84×0.47	0.85	
R D 517	円形	2.67	2.22	0.62	
R D 518	楕円形	1.98×0.59	1.52×0.47	0.38	
R D 519	楕円形	1.35×0.63	1.23×0.48	0.18	
R D 520	円形	0.78	0.62	0.21	
R D 521	不整円形	1.15	0.98	0.24	
R D 522	方形	1.42	1.31	0.16	
R D 523	楕円形	2.03×1.07	1.66×0.76	0.23	
R D 524	不整方形	1.96	1.68	0.62	
R D 525	不整円形	0.88	0.41	0.24	
R D 526	楕円形	1.71×0.78	1.56×0.46	0.34	10 C
R D 527	不整方形	2.54	2.37	0.21	
R D 528	楕円形	1.81×0.99	1.52×0.73	0.26	
R D 529	楕円形	1.78×1.07	1.62×0.82	0.61	
R D 530	円形	0.81	0.59	0.19	
R D 531	不整円形	1.38×1.13	1.14×0.79	0.21	
R D 532	円形	1.51	1.30	0.29	
R D 533	円形	0.68	0.52	0.17	
R D 534	不整円形	0.77	0.56	0.09	10 C
R D 535	不整円形	0.69	0.51	1.16	
R D 536	楕円形	0.84×0.78	0.77×0.66	0.19	
R D 537	楕円形	1.89×0.88	1.67×0.61	0.81	
R D 538	不整円形	1.26	0.89	0.61	
R D 539	円形	0.92	0.64	0.13	
R D 540	方形	2.47	2.32	0.09	
R D 541	不整円形	1.43	0.98	0.27	
R D 542	楕円形	2.09×1.09	1.81×0.58	1.06	
R D 543	楕円形	2.26×0.99	1.41×0.51	1.01	
R D 544	楕円形	1.86×0.78	1.17×0.51	0.59	
R D 545	楕円形	2.03×1.14	1.81×0.63	0.72	
R D 546	楕円形	2.06×0.95	1.79×0.56	0.80	
R D 547	不整円形	1.01×2.07	0.84×1.86	0.11	
R D 548	不整円形	1.78	1.69	0.2	
R D 549	楕円形	2.11×1.03	1.84×0.56	0.58	
R D 550	楕円形	2.64×1.06	2.43×0.74	1.09	
R D 551	楕円形	2.27×0.81	2.45×0.42	1.15	
R D 552	楕円形	3.12×1.31	2.69×0.42	1.72	
R D 553	楕円形	2.73×1.57	2.77×0.33	1.76	
R D 554	楕円形	2.13×0.85	1.78×0.59	0.81	
R D 555	楕円形	2.54×0.84	1.76×0.42	0.82	

第 6 表 平安時代以降の土坑計測表 1

遺構番号	平面形	規 模		深さ (m)	時 期
		上端 (m)	下端 (m)		
R D 556	橢円形	2.01×0.78	1.78×0.56	0.83	
R D 557	橢円形	2.00×0.78	1.67×0.52	0.81	
R D 558	橢円形	1.37×1.08	1.59×0.54	0.78	
R D 559	橢円形	2.15×1.24	1.28×0.47	0.97	
R D 560	橢円形	1.98×1.22	1.57×0.62	0.93	
R D 561	円形	1.09	0.82	0.31	
R D 562	橢円形	1.99×1.47	1.87×1.39	0.24	
R D 563	円形 (フラスコ)	0.59	0.67	0.38	
R D 564	橢円形	1.94	1.39×0.47	0.92	
R D 565	不整円形	1.65	1.24	0.21	
R D 566	橢円形	1.97×0.92	1.68×0.58	0.82	
R D 567	橢円形	2.18×0.78	1.87×0.53	0.68	
R D 568	橢円形	2.11×0.76	1.92×0.47	0.77	
R D 569	橢円形	1.92×0.77	1.69×0.49	0.33	
R D 570	橢円形	1.80×0.54	1.68×0.35	0.37	
R D 571	橢円形	1.12×0.78	0.95×0.61	0.16	
R D 572	不整橢円形	3.63×1.01	3.35×0.73	0.13	
R D 573	方形	1.86	1.75	1.16	
R D 574	方形	2.03	1.47	0.55	
R D 575	不整方形	1.03	0.87	0.14	
R D 576	不整方形	0.96	0.81	0.23	
R D 577	不整方形	0.95	0.69	0.28	
R D 578	円形	0.66	0.49	0.35	
R D 579	円形	1.03	0.68	0.18	
R D 580	不整円形	1.89	1.64	0.26	
R D 581	橢円形	1.92×0.94	1.52×0.66	0.43	
R D 582	橢円形	2.61×1.72	2.33×1.53	0.38	
R D 583	円形	0.77	0.51	0.15	
R D 584	橢円形	2.16×1.15	2.02×0.54	1.36	
R D 585	橢円形	2.28×1.26	1.61×0.49	1.12	
R D 586	橢円形	2.25×1.35	1.71×0.64	1.39	
R D 587	橢円形	2.09×1.16	1.54×0.46	1.12	
R D 588	橢円形	1.92×1.07	1.47×0.56	0.94	

第7表 平安時代以降の土坑計測表2

体部下端～底面には手持ちヘラケズリ調整が施される。5・6はロクロ成形のあかやき土器坏で、底部切り離しは回転糸切無調整である。

中 世 中世の土坑は、第4・6・12次調査区に認められ、第12次調査区（Q3・4区）には、12世紀後半～13世紀前半の掘立柱建物跡（R B1006～1009）・竪穴建物跡（R E1004）・溝跡（R G1004～1006）などで構成される屋敷跡に伴う土坑（R D1011～1020・1031～1033）が確認された。

出土遺物（第134図13～17） 13・14はロクロ成形のかわらけで、底部切り離しは回転糸切無調整である。15は常滑甕の体部片で、外面にタタキが認められる。16は白磁碗の口縁部片である。17は箭頭部および茎尻欠損の雁又鏃である。

(7) 平安時代以降の焼土遺構・溝跡・ピット (付図1)

焼土遺構 S4区とT4区の境界付近よりRF507～510の4基が検出された。図面等が罹災したため全体図での位置表示のみであるが、平均的に規模は長軸1.5m前後、短軸1m前後の楕円形を呈し、底面は堅く焼き締まる。焼土付近には多量の土師質土器片があり、歪み・ひびが生じているものもある。図示できたのは第134図8の皿のみであるが、破片では坏が多い。

溝跡 古代の溝跡12条 (RG501-1～511)、中世の溝跡17条 (RG1001～1017) が検出されている。全体図での位置表示のみであるが、RG1004・1013からは古代から中世にかけての土師質土器小皿や12世紀代と考えられる陶器片が出土している。

ピット ピットは調査区のほぼ全域より検出されている。柱穴と思われるピットは総数2,664口を数える。ピット埋土には焼土や炭化物を含むものが多く、検出は容易であった。ピット内からは12世紀の遺物が出土していることからそれに近い時期の遺構と思われる。

出土遺物 (第134図8～10・18～27) 8はロクロ成形の土師質土器皿で、内外にタール状の付着物が認められる。9は土師器坏で、内外に黒色処理およびヘラミガキが施される。10はあかやき土器小形甕の体部片で、刻書文字が認められ「藤部愁…」。18は磁州窯系の黄釉褐彩壺の口縁部片か。19～22は土師質土器小皿である。23は同安窯系の青磁碗の小片で、櫛描文が認められる。24は中国白磁碗の小片である。25は常滑三筋文壺の体部片で、内面に指頭整形痕とハケメが認められる。26・27は箭頭部・茎尻欠損の鉄鏃である。

(8) 平安時代以降の遺構外出土遺物

出土遺物 (第135図1～136図56) 1～30はロクロ整形による土師質土器小皿または小形坏である。31～47は手捏かわらけで、指圧またはヘラケズリ調整後ヨコナデが施される。48～50は青磁碗で、48・49には蓮弁文が認められる。51は片口の常滑高台付捏鉢で、外面体部下半には回転ヘラケズリ調整が施される。52は須恵器系の搦鉢で、底部を欠く。54は瓷器系捏鉢の体部片である。53・55・56は常滑甕の小片である。

出土遺物 (第137図57～73) 57～62は鉄鏃で、61・62は箭頭部および茎尻を欠く。63～65は刀子で、64は茎部、65は刀身部である。63は切先および茎部を欠く。66は刃部欠損の鍔鉋である。67は切羽、68は鉄輪である。69は針先および頂部欠損の釣針である。70は棒状鉄製品である。71は内耳鉄鍋の口縁部片、72は吊耳の鉄鍋で、脚をもつ。73は紡茎部欠損の紡錘車である。

Ⅱ まとめ

堰根遺跡より検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡19棟（R A 001～019）、土坑254基（R D 001～254）、平安時代の竪穴住居跡82棟（R A 501～582）、掘立柱建物跡1棟（R B 501）、土坑88基（R D 501～588）、溝跡12条（R G 501-1～511）、中世の掘立柱建物跡25棟（R B 1001～1025）、竪穴建物跡10棟（R E 1001～1010）、土坑42基（R D 1001～1042）、溝跡17条（R G 1001～1017）、柱穴2,664口である。

縄文時代 堰根遺跡からは、縄文時代中期の竪穴住居跡（R A 001・003・005～012・016・017・019）、中期から後期にかけての土坑群（R D 001～254）・土取跡？（R X 001～003）が検出された。注目されるのは縄文時代中期後葉から末葉にかけての集落変遷である。

中期の竪穴住居跡は隣接する柿ノ木平遺跡（第1～3分冊参照）における土器変遷を参考に大別すると、R A 007－柿ノ木平Ⅰ群、R A 001・006・010－柿ノ木平Ⅲ群土器、R A 005・017－柿ノ木平Ⅳ群土器、R A 008・012・019－柿ノ木平Ⅴ群土器、R A 003－柿ノ木平Ⅵ群土器に分けられる。土器文様において連続性が見られないR A 007を除くと、各段階において3棟前後の集落であったことが考えられる。

弥生時代 弥生時代前期から後期の土器が出土している。単独での検出だが、後期の赤穴式を伴う竪穴住居跡が1棟検出されており（第1図）、平面形は方形を呈し、炬は確認されなかった。埋土からは交互刺突文と細沈線による文様を特徴とする土器群が出土しており、器種は甕類を主体に蓋（第78図1・2）などが出土した。

遺構外からは前期の砂沢式に類似する土器群（第94図133～150）、山王Ⅲ層式に類似する土器群（第95図151～171）、榊形罎式併行の土器群（第96図172～177）、天王山式に併行する土器群（第96図178～第97図195）、赤穴式古段階の土器群（第97図196～第98図239）が出土している。

古墳時代 僅かであるが、北海道系の後北C₂式土器が出土している（第99図240～249）。

平安時代 堰根遺跡で主体となる時代で、平安時代から中世初期にかけての遺構・遺物が検出された。遺構時期は大きく白色火山灰（十和田a火山灰）が堆積するものとししないものに大別される。火山灰の有無については遺構説明文に記述している。記述のないものは火山灰が確認されなかったものであるが、罹災により詳細が不明なものについても火山灰の有無は記述していない。

今回の調査では、平安時代の竪穴住居跡を切る陥し穴状遺構が確認されている（第69図R D 552土坑、第8図版）。R D 552土坑は埋土に白色火山灰を含み、平面は長方形、底部断面は箱形を呈している。出土遺物はないものの、竪穴住居跡との重複関係と埋土に白色火山灰を含むことから平安時代以降の土坑と考えられる。また、同様に埋土に白色火山灰を含み、形状が類似する土坑は他にも多数確認している（R D 537・542～546・549～560・564・566～570・581・584～588）。R D 542土坑からは、上層であるが土師器坏が出土している。県内各地でも同様の事例は確認されており（2007（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター「宮沢原下遺跡発掘調査報告」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書495集）、盛岡市内では川目C遺跡、大新町遺跡などで確認されている。

従来、陥し穴状遺構は縄文～弥生時代に属するものと考えられてきた。しかし、近年、十和田 a 火山灰を埋土に含む陥し穴状遺構の調査事例が報告されるようになり、古代にも陥し穴が存在のすることが示唆されてきた。本遺跡の平安時代の竪穴住居跡を切る陥し穴状遺構の発見は、さらにそれを裏付けるものとする。

堰根遺跡より検出された平安時代の遺構の多くは、前述したとおり火山灰の有無とロクロ使用の土師器坏と甕などの土器の特徴から 9・10世紀代の構築と考えられる。北上川東岸では 9・10世紀代の集落を全域調査した例が少なく、今回の調査によって得られた成果は今後の研究において重要な例になるであろう。

中 世 遺跡全域より、12世紀代を中心としたかわらけ・常滑産陶器・輸入陶器が出土した。また、R B 1001～1024掘立柱建物跡なども同時期の構築と考えられる。盛岡市内において12世紀代の遺跡を全域調査した例はなく、今回の調査により掘立柱建物、竪穴建物で「村」が構成されていたことが明らかにされた。

柿ノ木平遺跡

堰根遺跡

—浅岸地区区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ—

第4分冊 堰根遺跡 本文編

2008年3月31日 発行

- 編集 盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1
電話 019-635-6600 F A X 019-635-6605
- 発行 盛岡市都市整備部区画整理課
〒020-8531 岩手県盛岡市若園町2-18
電話 019-651-4111
- 印刷 河北印刷株式会社
〒020-0015 岩手県盛岡市本町通2-8-7
電話 019-623-4256